

もっといい明日が見えてくる - Letters from Gnable

Gnable G-net

グノレット

vol. 22
2018年12月発行

中学受験×大学受験 講師座談会

中学受験と大学受験のグノ。共通点は、夢中になれる授業。
学びの先にあるのは、生きる土台となる“考える力”。

保護者座談会 2018

絶妙な距離感で接してくれた中・高時代。
親以外で、子どものことをしっかり見てくれた先生方は、
とても大きな存在でした。

グノーブル 先輩インタビュー

整形外科医・スポーツドクター 可知芳則さん

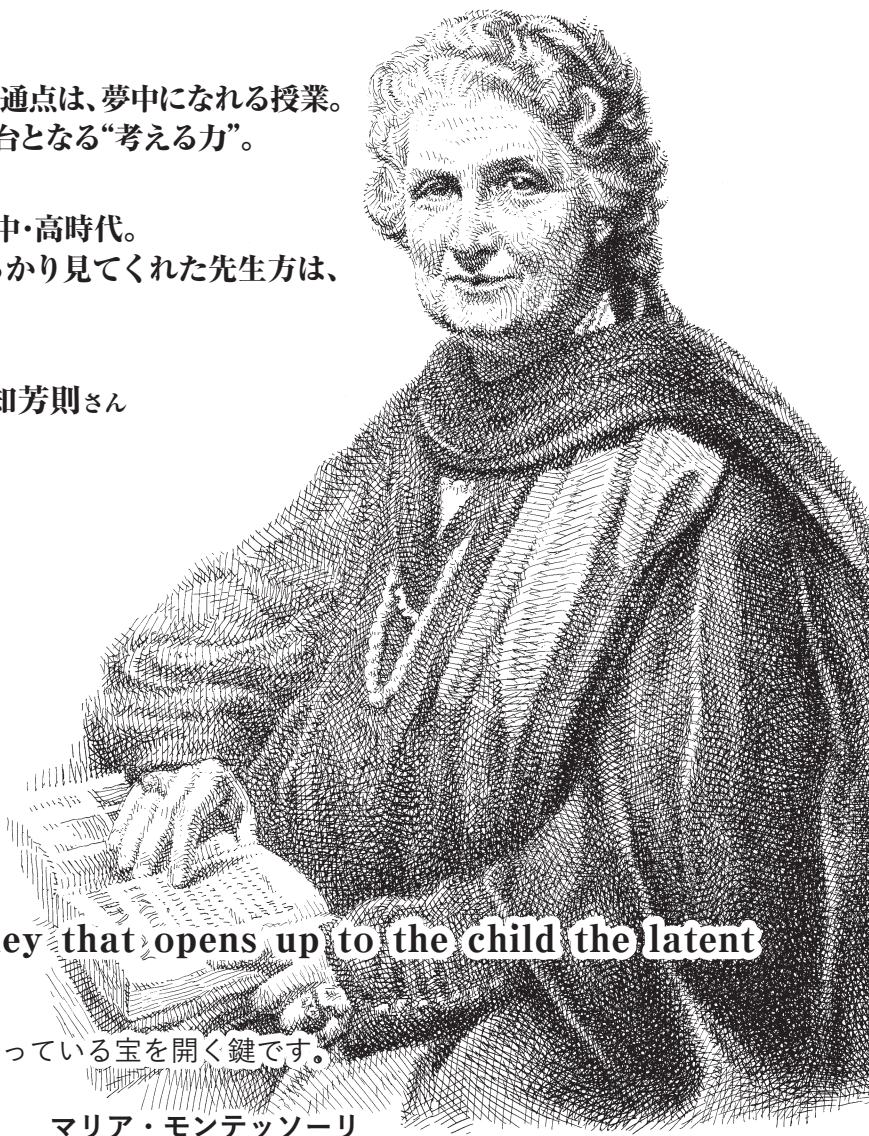
Gnable Teachers' Voice

企画部長 (英語科) 関田裕一

4技能で問われる英語力より、
一段高い次元の力を育む。

英会話グノキッズ

英会話グノキッズを徹底解剖！



Concentration is the key that opens up to the child the latent treasures within him.

集中力こそ、子どもが心の中に持っている宝を開く鍵です。

マリア・モンテッソーリ

Maria Montessori (1870年8月31日～1952年5月6日)

ローマ大学最初の女性医学博士、科学者、幼児教育者。障がい児の治療教育に携わり教育学へと研究分野を広げ、幼児教育の方法「モンテッソーリ法」を考案。その目的は「自立して、有能で、責任感と他人への思いやりがあり、生涯学び続ける姿勢を持った人間を育てる」ことで、今日、国際的に再評価されている。



Gnable GROUP

Gnoble
Cross
Talk

中学受験
×
大学受験



おだくひろ
櫻田 邦浩

(大学受験グノーブル数学科)

しみずまこと
清水 誠

(大学受験グノーブル英語科)

中学受験と大学受験のグノ。共通点は、夢中になれる授業。
学びの先にあるのは、生きる土台となる“考える力”。

中学受験と大学受験。一言で「受験」とはいいても、そのありようは大きく異なります。それでもグノーブルには、大きな視点に立って生徒たちを育む共通する姿勢があると言います。そこで今回、大学受験グノーブルから2名、中学受験グノーブルから3名の先生方にお越しいただき、日々の授業での指導においてどのような工夫をされているのかをお聞きました。

グノーブルだからこそ「芯」ともいえる共通した姿勢の一方で、子どもたちの心の成長に合わせてきめ細かく対応されている様子もうかがえました。グループとして小学生から高校生までの一貫した教育体制の、さらなる充実が大いに期待できる座談会となりました。

それぞれの
教育現場の今

櫻田：今の教育業界全体が知識偏重から、考えたり推測したりすることを重視する傾向にシフトしてきています。例えば大学入学共通テストに向けたプレテストの問題を見ても、発想力や論理力が重視されています。先を見越して自分で必要な情報をいかに集めるのかという力も求められています。

数学科では現在、こうした新しい大学入試やシステムに向けて、中学受験の先生方とも意見を交換しながらカリキュラムやテキストを刷新しています。時代とともに変化する制度に十分に対応できる工夫をしているのはもちろんですが、決して変わらないものもあります。

その1つはグノーブルの「数学」の核である「物事を論理的に考え、自分の力で問題を分析し、解決する能力を身につけてもらう」という姿勢です。ここでの数学の学習を通して生徒の将来、大学生、社会人になってからも役立つものの考え方、見方を身につけてほしいと考えています。

例えば、東京大学の「アドミッションポリシー」の「高等学校段階までの学習で身につけてほしいこと」の一節に「数学的に問題を解くことは、単に数式を用い、計算をして解答にたどり着くことではありません。どのような考え方に沿って問題を解決したかを、数学的に正しい表現を用いて論理的に説明することです」とあります。数学の中には、単純に数学的な技法や知識を問われる問題もありますが、とりわけ東大などの入試問題では、知識の多寡ではなく、知識をいかに運用するかが問われます。いわば「やさしい良問」です。これは、難解であることを良しとするのではなく、解き方だけを見れば当たり前の手法を使っているのだけれど、その当たり

前のことが易々とは出てこない盲点を突くような問題です。こうした問題に向き合う時に求められるのが「論理的思考力」なのです。グノーブルでは重箱の隅をつつくような話や、テクニックを使って要領よく得点する方法ではなく、論理的思考力を高めていくという基本姿勢を今後も変わらず大切にしていきます。

また、一人ひとりの生徒と向き合って授業を進めていく点も変わりません。大学受験で求められる数学を念頭に置きながら、目の前の生徒のレベルにあったものを提供しています。生徒にとってもう少しで解けるといレベルの問題が解いていて一番楽しい。簡単すぎても、難しすぎてもつまらないのです。生徒の手がどれだけ動くか、実際の授業では生徒の表情も見ながら問題を選んでいきます。一人ひとりのノートや答案に常に目を通す姿勢もすべての学年で堅持しています。

清水：英語科でも中学生の英語の新カリキュラム作りに取り組んでいます。

カリキュラムを作成する際には、私

自身が中学生から大学受験生まで幅広く担当していることを活かして、全体を俯瞰しながら一貫した学習の流れをつくっていくということを強く意識しています。

最近の英語教育では、その基準をヨーロッパ言語共通参照枠「CEFR (Common European Framework of Reference for Languages)」に置いています。そして「CEFR」をもとに、より日本の教育に合わせた「CEFR-J」というものが作成されました。「CEFR-J」には、英語を使って具体的にどのようなことができるかリストアップされており、4技能すべてに関する指導を行えるように作られています。グノーブルの中学部の先生たちも、テーマやシチュエーションを中心に、使える表現や語彙を集めてカテゴリ分けをして、すでにプリント教材の中に盛り込み始めています。

また2020年度からの本格的な始動を目指し、カリキュラムの全面改訂も行っているところです。内容は、中学1・2年生を中心に、基礎を身につけることに加えて、自分の身の周りについて発信することをテーマに、英語を



やました ともひさ
山下 倫央

(中学受験グノーブル国語科)

もりた かずき
盛田 一樹

(中学受験グノーブル算数科)

ながい ひろやす
永井 裕康

(中学受験グノーブル理科科)



道具として使いこなせるようになることを主眼としています。英語は小学5・6年生から正式に教科化されますので、中学1年生が習い始める内容も当然変わります。このような変化に対応するため、グノーブルが大切にしてきた「コミュニケーションと思考」に使える、知的レベルの高い英語力」の習得を、4技能を踏まえた形でカリキュラムに組み込んでいます。

グノーブルで行っている授業は一方通行型ではなく、インタラクティブな形でやり取りをしています。生徒も先生もお互いに気づきを得ながらその場をつくり、より考えを深めていきます。こうした授業を毎週実践することで、小手先ではない本来の英語力が向上し、テストでも高得点をとれるという流れが理想的だと考えています。

山下: 私の担当科目である国語に関して言えば、まず今現在について、日本語が軽視される時代になりつつあるという印象を持っています。具体的には、活字離れという大きな時代の趨勢があり、さらにカタカナ言葉で済ませてしまう風潮、漢字は使わずにひらがな表現のままでいいといった傾向も見られます。これらを踏まえると、学校教育の枠とは別のところで、言葉の素養を身につける場として、グノーブルの授業はますます重要な役割を担う必要があると思っています。

います。

言葉には大きく2つの機能があります。1つは思考を的確に進めるための“論理の道具”としての側面です。もう1つは、豊かな感情を表現し、人に伝えていく“情緒の表現伝達手段”という側面です。国語科として、いろいろな文章をもとに、この2つの機能を学んでもらいたい。特に小学2・3年生のうちから子どもたちには、きちんとした論理的な言葉の紡ぎ方、それと同時に情緒の幅広い表現の仕方を身につけてもらいたいと思います。

小学生の国語の学習では、生徒たちの内的世界、人間理解の幅を広げることが大切であるとも考えています。この一歩が踏み出せるようになると、あの人はどういう人だろう？ この人は？ では、昔の人は？ 異文化の人は？ と生徒たちの知的好奇心がどんどん広がっていきます。自分とはかけ離れた人のことでも言葉を通して実感できるようになれば、国語は楽しい、もっと学びたいと思えるようになるのです。

そのために生徒たちに眼差しを常に向けて、納得できているかどうかを



見極めながら、たくさんの「あっそうか」につなげられるような時間をできるだけ多く持てるように心掛けています。

盛田: 私たちが算数の指導で大切にしていることは、中学受験で完結することなく、中学・高校といった先々の数学にもつながる論理的思考力を育てていきたいという思いに集約されます。

中学受験の先まで見据えることの大切さというのは、実際の入試問題を見ても認識することができます。近年の算数の入試問題を見ると、かつてより明らかに問題文が長文化しており、問題設定も複雑化しています。一題一題の問題処理量は増え、題材自体が高度化しています。これまで小学生には問われてこなかったレベルの問題が増え、その中には中学生の数学知識があれば簡単に解けるけれども、小学生にとっては全くの初見となる問題もあります。言ってしまうとこれは「算数と数学のボーダーレス化」であり、この傾向が以前より強くなってきています。

学校側の考えとしては、単純に



習ったことをテストで試したいだけではなく、見たことがない問題であっても取り組む力であったり、一見、初見のように見えても実は基礎の応用でしかないことを見破ってほしいという意図があるのでしょう。この傾向に対して、グノーブルでは、解法を覚えて丸暗記するという方法ではなく、まずは自分で試して、手を動かしてもらおう。そして、人から解説を聞く前に自分で考える時間を設ける。さらには数学的な切り口を紹介するなど、授業の中で工夫をこらしています。

中学受験グノーブル設立以来、実践している具体的な方法として、解説したものを単にノートにとって覚えてもらうのではなく、「ここはどう思う?」「これとこれにはどういった関係性があると思う?」といった様々な質問を投げかけることで思考の揺さぶりを図っています。これは各教科に共通した指導方法です。生徒たちには授業時間に頭をフル回転させてもらい、先々までつながる思考力を養成したいと考えています。

永井: 中学受験の理科は、高校・大学受験の理科と比較すると、非常に範囲が広く、しかも深さも求められる欲張りな教科です。大学受験の理科の場合、物理・化学・生物・地学の分野の中から選択して学ぶこともありますが、中学受験の理科は、それらすべてを扱います。4分野すべての

単元を合わせると、40～50単元近くになるでしょうか。また、知識が直接問われる出題があることは当然として、自身が持つどの知識をどのように活用するかが試される思考問題や、リード文や実験結果をもとにして考察する読み取り問題も出題されます。つまり、4分野を広く学びながら、知識面や思考面で深い部分を問われるのが中学受験の理科だと言えます。

だからこそ他科目と比べると学び始めの段階では、よりやわらかく、よりハードルを下げて、面白さを味わえるように工夫しています。

例えば3年生の授業では「最近暑いよね」ということから始まり、「なぜ夏は暑いのか」という問いかけをします。生徒たちからは「夏は、地球がもっとも太陽に近づくから暑くなる」という発想が出てきたりします。ところが実際は「夏は、地球がもっとも太陽に近づくから暑くなる」という答えは間違いです。確かに地球は公転していて、太陽との距離は一定ではありません。しかし、暑いといわれている7月や8月は、実際は一年の中でもっとも太陽との距離が遠いのです。

この事実を生徒へ提示して、しっかりと納得してもらってから、「では、どのようなことが理由なのだろう」と、次の展開に入ります。

このように生徒が様々な発想をして、それを言葉で表現することは理科でも大切なことです。我々は次につながるヒントを提示し、生徒には提示されたヒントをもとに、少しずつ難易度を上げながら理解を深め、核心に迫る発想を自分たち自身で掴んでほしいと思います。

学年が上がるにつれ学ぶ内容は難しくなりますが、今後の勉強内容を見越せばこそ、学習の入り口では生徒自身の「どう思うか」を大切に、想像力を羽ばたかせて発想することの楽しさを味わってもらっています。その一方で講師からは事実を提示し、生徒たちは対話を重ねながら理解を深めていきます。自分で考える楽しさを味わいつつ、論理性をもって思考力を深めていくのがグノーブルの授業です。



勉強に楽しく取り組んでもらうために

永井：中学受験グノーブルでは小学1年生のお子さまからお預かりしています。学習の入り口の段階として、何かを知ることや学ぶことは、ワクワクする楽しいことだというイメージを持てるように常に意識しながら授業に臨んでいます。

その上で、通常15人程度の集団授業ですが、1対15ではなく、あくまでも1対1で15人とつながっているイメージで授業を行っています。個々との線を15本つくることで、15人という集団における活力、エネルギーが生まれます。集団の中で生徒自身が他者の意見を聞きながら、自分は どう思うかと考えることも大切です。一人ひとりに意識を向けながら集団の良さを活かすのがグノーブルの授業だといえると思います。

盛田：世間一般の誤解として、「子どもたちに勉強させるのはかわいそう」とか、「子どもたちにとっては勉強はつまらないものだ」ということがあるように思います。

しかし大前提として、人類が積み上げて深めてきた知恵を学ぶことは本当に楽しく、面白いものです。生徒たちは、理解が深まり解ける自信をつけるにつれて活き活きとしてきます。生徒たちの伸びたいという自然な欲



求をうまく活かし、それにフタをしないことに心をくだき、基本的にはその成長を見守っていく。あとは授業で、こういうことを知っておくといいよ、こういう考え方もあるよと適切なヒントが与えられれば、生徒たちは自らの力で伸びていくものだと思います。

山下：国語の枠の中で考えると、知ること自体が楽しいという状態は、確かにあると思います。しかし、段々と知的的好奇心だけでは生徒たちを引き込めないケースが増えてきます。感覚では3・4年生くらいからです。これは扱っていく題材に生徒の日常と大きくかけ離れたものが出てくるからです。

例えば、戦時中のお母さんの気持ちを問うような問題が出た時に、早い段階で「わかんない」と言ってしまう生徒はどうしても出てきます。国語の勉強というのは、自分と違う人の感性やものの見方について文章を通して理解を深める作業ですので、どこかで必ず「わかんない」と思う問題は出てきます。その時が教える側の腕の見せどころです。具体的な実感や、説得力を持つ形でストーリーを伝え、こ

ういう人がいて、このように思うことがあるんだよ、と知ってもらえるように工夫します。表情を見て、生徒が納得しているか、わかっていないかを見極めながら授業を進めることで、生徒たちは初めて「あ、そっか」という知的に楽しい状態に持っていきかけを掴めるようになります。

こうして「そうかもしれない」という一歩を踏み出せると、段々と生徒たちの知的的好奇心は広がっていきます。逆に、自分以外の「人間のありさまを知ること」に興味を持てなければ、ある一定水準以上の勉強にはつながっていきません。「入試に出るから覚えよう」ということでは限界があるのです。

清水：勉強をしていて楽しいと思うことのひとつは「発見」だと思います。自分とは違うものの見方や感性を学ぶこと、書き手の立場を想像してみる、筆者の論理を的確に辿って新しい物事を理解していくこと。これらを大切にするのは英語も同じです。

高校生のリーディングの授業で頻繁に行っている要約は、知的にレベルの高い英文を、誤解も曲解もするこ

となく的確にまとめるという学問の土台を築く作業です。英語・日本語の違いはあれ、文章を通して自分の理屈ではなく相手の主張や論理展開を正確にまとめるという点では、小学国語から一貫した学びがあります。英文の中には筆者独自の考え方、伝えたいことがあるはずなので、それを知ることで新たな視界が開け、喜びを感じながら思考力の幅も、想像力の幅も広げていくことを目指しています。ここには、狭い受験勉強にはとどまらない、生徒たちの将来を考えるグノーブル共通の姿勢があります。

また、グノーブルでは英単語をただ暗記するという作業を生徒に強いることは絶対にしません。単語の語源や成り立ちまで踏み込んだ解説を聞くことで、単語の持つ文化的背景に触れ、単語について興味を持てる授業を行っています。印象が深くなればなるほど、単語が生きた言葉として記憶に残るようになります。

櫻田：中学生が実感する勉強の楽しさには2種類あると思います。1つは「知る喜び」を感じることで。単に事実を知っているということではなく、その理由を知った時の感動と喜びです。

例えば、新中学1年生対象の「スタートダッシュ講座」で、「 $(-2) \times (-3) =$ 」の答えを尋ねると、中学受験経験者はほぼ全員手を挙げ「答え



は「+6」と答えます。ですが、では「なぜ「+6」になるのか」を尋ねると、サーッと手が下がります。そこでその理由を説明して、「あっ」と思ってもらえるとその後は単純な計算問題であっても楽しそうに取り組んでくれます。つまり、理由がわかって取り組むのと理由もわからず取り組むのとでは姿勢がまるで違ってきます。しっかり腹に落ちるかどうかがとても大切であると考えています。それは、生徒たちの表情からも容易にうかがうことができるのです。

2つ目は「できる喜び、成長の楽しさ」を知ることが勉強を楽しいと思える要因です。全くできないことをずっと続けていても苦痛でしかありません。単純作業のような勉強の継続も苦行でしかありません。クラス中の誰もが「できる喜び、成長の楽しさ」を知ることができる授業に大切なのは、教える側の観察力と、的確な教材を用意する問題作成力、そして授業の構成力です。クラス全員の手が動く問題と、半分くらいの手が動く問題、そして一部の生徒しか手が動かないだろう問題、これらを授業ですべては使わないとしても準備だけはしています。こうした準備の積み重ねが時間の経つのも忘れて夢中になれる

授業の実現につながるのです。

クラスのレベルを正しく把握し、適切な難易度の問題を提供することが、できる喜びを味わいながら、成長できる楽しさを実感してもらえることにつながると思います。

そのためにも、大学受験の数学と中学受験の算数を両方担当している先生方に「中学受験ではどのレベルまで勉強するのですか」ということをよく聞いています。「小学生がここまでやっているのなら、中学生ならこういうこともできる」と中学生用のテキスト作りに活かしています。

受験に向かう親と子の距離感

櫻田：中学入試は「親と子と一緒に臨む受験」だと思います。しかし入試が終わって、そのままのペースで中学生の勉強に進んでしまうと、干渉事があまりに多すぎて、生徒たちの自主性が育まれない状態に陥ります。お子さんが心配なのはよくわかるのですが、子どもを信じて任せる部分も必要だと考えています。

先日行われた、大学合格者の保護者座談会*の場に私も立ち会っていま

*本誌11ページに掲載しています。



した。実はその中に、かつて私に相談のお手紙をくださった方もいらっしゃいました。そのお母さまが、当時心配されていたこととどのように対処されたのかという、結局はお子さんを信頼して見守ることにされたことでした。

座談会の場で改めて感じたことは、お子さんを信じて見守りながら成長を待つという姿勢が、ご参加いただいた保護者の皆さんに共通していたことです。お母さま方が本当にお子さんのことをよく見ていて、心配もしていらっしゃったのが伝わってきましたが、それでも本人には多く口を出さない。それが親御さんとしての非常に大切なスタンスであると感じました。

お子さんが本当に悩みを抱えた時、親も相談相手として選択肢に入るといった関係が高校生の段階で築けているというのは素敵なことだと思います。過干渉の親御さんや、無関心な親御さんにはお子さんは相談しないかもしれません。

また、子どもたちが成長する時は、子どもたちが苦難を経験し、それを乗り越えて行く時です。過保護によってその苦難を取り除いてしまえば、子どもを成長させる大切な機会を逸してしまう気がします。

清水：中学1・2年生の低学年においては、親御さんにお手伝いいた

いた方がいい場合もあります。英語の場合は習慣化することが大切で、特に耳と口を鍛えることが大切です。英語の音に慣れることで、英語表現ははるかに覚えやすくなります。ゆくゆくはリーディングの速度も精度も上がりますし、ライティングの力にもつながるといったメリットもあります。グノーブルの音声教材「GSL*」を毎日耳にして、音読をして、まねをするという習慣が身につくまでは、ご家庭でもサポートをして見守っていただけるとありがたいです。本人が一人でできるのであれば問題ありませんが、どうしても習慣化が難しいという場合もありますので。

しかし高校2・3年生になっているお子さんを親御さんがコントロールすることはほぼ不可能です。それを念頭に置いてお子さんの自主性を育み、子離れをしていくことが大切です。いざ問題を抱えた時に、お子さん本人が自分の問題として引き受けられるかどうかはそれまでの親子関係によると思います。

山下：中学受験担当の立場としては、親が関わることは必要不可欠な要素



だと思っています。年齢が下がれば下がるほど、その関係は強まるでしょう。特に言語を習得する過程における親の関わりについて言えば、子どもの言語能力の大半は、親の使う言葉で決まります。親のしゃべり方を子どもはよくまねるからです。

例えば、絵本の読み聞かせが非常に上手な親御さんのもとで育てば、情緒の発達面では明らかに有利な場合が多いです。先ほどの清水先生の英語のお話で「筆者の論理的確に辿る」という点に深く共感したのですが、国語の場合も同様で、これは「音読が大切」という話にもつながります。どんなに堅苦しい論説文でも、「この筆者はどんな表情で文章を書いているのだろうか」と想像できるか否かで読み取りの精度は変わります。

一方で、親御さんの関わりが「干渉」に変化してしまう分岐点は、子どもが成長していく中で、親以外の存在を模倣し始めた時に起こりやすいと思っています。様々な文章の書き手、あるいは作中の人物の中から、生徒たちが共感を覚える存在が出てくるかもしれません。それは文章に限ら



ず、現実社会でも同じです。そういった共感ができるように指導をしていますし、生徒たちの中に生きていく上で必要なロールモデルを増やしていきたいと思っています。

そのようなロールモデルを模倣し、子どもがあらゆる「生き方、価値観、口調」を取り入れて成長し始めようとしている時に、親御さんが口を挟むことで、結果として取り入れの妨げになってしまうこと、それが「干渉」ということになるのかもしれない。その時、「親の言うことだけ聞いていればいい」と言ってしまうのではなく、子どもがロールモデルを模倣していく過程で、親の影響というものを子ども自身で相対化できる力を身につけていくことこそが大切だと考えています。

盛田：確かに言語形成期である幼児期は親御さんがたくさん関わった方がいいと思いますが、中学受験期ではケースバイケースだと言わざるをえません。親御さんが干渉した方がうまくいくケースもありますし、中学受験の段階ですら干渉しない方がうまくいくケースもあります。その前提として本人のポテンシャルや、個々の環境要因があるからです。

長い目で見ると親御さんが干渉し

ない方が子どもは大成するという傾向はありますが、直近の中学受験を乗り越えることを念頭に置くのであれば、親御さんがサポートした方が結果は出やすいという面もあります。

「うまくいったかどうか」の基準をどこに置くのかはご家庭の考え方による部分もあります。だからこそ親子の関係については、塾からアドバイスはできてもそれがすべてということではなく、まずはご家庭でしっかりと考えていただくことが必要だと思います。

永井：「親御さんも子どもに対して敬意を持って接してほしい」という思いを強く持っています。

例えば、「うちは主体性を持って勉強しろ」という教育方針ですから、基本的にはすべて子どもに任せます」という親御さんがいらっしゃるとします。主体性を尊重して子どもに考える機会を与えるということは大変良いことです。しかし一方で、任せすぎて子どもたちがサポートを求めているサインまで気づかずに無視してしまうということも考えられます。そのような親御さんが相談にいらっしゃる場合には、あえて反論を提示して、客観的に考えていただけるようにしています。

逆に干渉しがちな親御さんが相談に来られる場合でも、自主性の大切さをご理解いただくために反対の意見をお伝えすることもあります。

ご家庭の教育方針を頑なに貫いたり、塾の講師の意見をうのみにするのではなく、お子さんのことをよく見て、程よい距離感を探り続けていただくことを願っています。

伸びる生徒と伸び悩む生徒の違いはどこにあるのか？

永井：何をもって「伸びる」と言うのかによっても話は変わってくると思います。仮に成績を上げることを「伸びる」と捉えるのであれば、結局はたくさん問題を解き、反復することが必要です。それに対して楽しみを感じられる生徒であれば、受験に合格するという視点では理想的な学習方法かもしれませんが、実際はそのような生徒ばかりではありません。ですから、生徒たちを個々に伸ばすという意味では、成績をいかにして伸ばすかということだけを話しても仕方ないと思います。

成績も学力も学習意欲も、塾である以上はそのすべてを伸ばさなければいけないと思いますが、長い目で見れば学習に向かう姿勢を伸ばしていくことが大切であると考えます。小学生の場合、その姿勢の根底にあるのは、話をきちんと聞くことができるかどうかです。それが、あらゆる面において「伸びる」ということにつながっていると思っています。

ですから、話を聞かない生徒に対しては、厳しい姿勢で臨んでいます。どうしても長い時間集中することができない場合は、様々な工夫をしたり、時には論し、毅然とした指導をしていかなければならないこともあります。

盛田：算数の技術的なことから言え



ば、計算能力が高い生徒の方がしっかりと得点できるようになります。計算力は将来の数学力にもつながります。

ただしやはり、根本的には、話を聞ける生徒、素直な生徒が伸びます。基本が整っていることが応用力や独創力の土台になるからです。その上で算数に限らず全体の成績が伸びていく生徒に共通することは、目標への意識が高いということです。「自分はこうしたいんだ」というものを持っていて、「こうするには、これをがんばらないと」ということを口で言うだけではなく心でわかっている生徒です。

山下: 逆に伸び悩む生徒についてお話しします。例えば教室で保護者向けのお知らせを配ることがあります。その時にすぐに読み始める生徒と、パッと鞆にしまう生徒がいます。知的好奇心の豊かな生徒は自分に関わることにすべてに何か意味があり、「いる、いない」ではなく、「わかりたい、知らずに放っておけない」と感じて内容が気になり、保護者向けのお知らせにも目を向けずにはられません。さらに「これはどういう意味ですか」と聞いてくることもあります。

「これは親が読むものだ」としまい込んでしまう生徒のご家庭では、塾

のことはあまり話題にはならないのかもしれませんが。一方、配られてすぐに読む生徒は、お知らせを家に持って帰るとすぐに親御さんがそれを読まれるのかもしれませんがね。お母さんが「ふむふむ」と目の前で読んで、「あら、そうなの。なんで?」というような会話をしている環境があるのなら、子どもたちもまねをしてそれに興味を持ち、理解しようとするのではないのでしょうか。

そのような習慣によって、どんなことも、自分に関係のあることとして興味を持ち、好奇心の幅を広げてい



けるかもしれません。そのためには、模倣の対象になれるように、親だけではなく我々講師も含めて周りの大人全員が身をもって見本となる姿を子どもに見せられるといいでしょう。

清水: 学習意欲や知的好奇心が旺盛であれば、当然、大学受験での良い結果につながります。

同じ授業を受けていても、授業で新たに発見したことをしっかりと自分の頭で納得をして、それを丁寧に積み上げていくことができる生徒の学力は着実に伸びていきます。ただ漠然と大量の問題を解くのでは、退屈な作業になってしまいます。退屈な作業をしていると、頭はどんどん麻痺していきます。勉強にも世の中にも関心がある生徒たちは「なぜ?」「どうして?」という思いがいつも湧いてきます。勉強している内容が社会ともつながっていき、ますます関心が高まります。

一つひとつをきちんと解釈した上で、目指すべき水準に対して自分がどの位置にいるのかということを中心に客観視し、それをもとに実行に移せることが重要だと思います。

櫻田: 私たちは中学1年生から大学受験時までの成長を見ていますが、必ずしも初めは成績優秀でなくても、

最終的に自分の目標を叶えていった生徒たちがこれまでも多数いました。

例えば、初めて授業を受けた時、全然できなくて涙があふれてしまった生徒がいました。その生徒はそこからスタートして、医学部を目指して一生懸命に勉強に取り組み、最終的には合格を掴み取りました。そんな生徒たちと共通した特徴は何だろうか考えた時に思いあたるのは、いつまでも諦めずに粘り強く考えている生徒だとか、正答を出せていても熱心にこちらの話を聞いている生徒だとか、解説と違う解き方だった時に「この解き方はどうですか」と聞きに来る生徒だったり…。

総じてみると「自分の足で立ち、歩こうとしている生徒たち」だと言えるかもしれません。逆に中学2年生以降に入塾する生徒の中からは「算数は面白かったけれど数学は面白くない」「数学はよくわからない」といった声もあります。そうした生徒は一般的に抽象化することが苦手だったり、受け身な学習態度で数学を勉強していることが多いように思います。

小・中・高の一貫した教育を目指して

櫻田: グノーブルは現在、中学受験グノーブルと大学受験グノーブルがあり、小・中・高と一貫して生徒たちをサポートできる環境が整いました。様々な学習塾がある中で、小・中・高の連携がしっかりとあり、同じ理念のもとで教育を進めていけるのはグノーブルの強みだと思います。

小学生からグノーブルに来ている生徒たちは「考える」ことがしっかりと習慣化できており、勉強に対して目をキラキラと輝かせています。その目の輝きを失わせることなく、生徒たちの期待を上回る教育環境を大学受験



グノーブルでも提供していきます。

未来を創っていく生徒たちが、受験の成功はもとより、本当に大切な夢を叶えていく能力を備えられるよう、この環境を活かして熱意をもってサポートしていくことが自分たちの責務であると考えています。

清水: 私たち大人の役目として大切なのは、生徒たちのがんばりをしっかり見守っていくことです。日々の授業を中心に一人ひとりと向き合っていくとともに、小・中・高と一貫した、大きな視点でも生徒たちの成長を見守っていきます。

また、グノーブルでは、生徒たちが大学に進学した後、さらには社会に出てからの活躍を常に念頭に置いた授業をしています。将来にわたって活躍できる原動力は、意欲的に学んでいく姿勢です。ですから、「勉強は楽しい」と思える授業をいつも実現できるようにこれからも努めてまいります。

山下: まずは何より目の前の生徒に全力を尽くすという日々を繰り返すことが大切だと思っています。また、生徒たちが前向き、主体的になるカギはやりがいのある授業をいつも受けられるかどうかです。日々の授業を通じて生徒たちに「グノーブルはい

いな。すごいところだな」と思ってもらえるようにがんばります。

盛田: 小・中・高と一貫した教育はとて大事なテーマです。これからはますます中学受験グノーブルと大学受験グノーブルの結びつきを深めていきたいと思っています。

永井: 私たちグノーブルが考えている一つの道筋を、今後はより一層、小・中・高の連携を深めて追いついていきたいと私も思っています。

また、生徒たちには、グノーブルのいろいろな先生たちと接してもらえたら良いとも思っています。グノーブルには本当に様々な個性の先生がいます。芯の部分が共通していれば、表面的な部分は先生ごとに違っていてもいいと思っています。様々なタイプの先生たちがいるからこそ、いろいろな価値観や多様性を尊重できる教育をすることができると思います。その上で目標とする学校に入ることができれば、生徒たちにとってはその成功体験とともに、グノーブルでの充実した12年間を過ごしたことになるのではないのでしょうか。

保護者 座談会 2018

絶妙な距離感で子どもと接してくれた中・高時代。
親以外で、子どものことをしっかり見てくれた先生方は、
とても大きな存在でした。



有村 麗子さま

有村 鉄平さんのお母さま
東大理科三類1年
(立教新座出身)



内田 知美さま

内田 未来さんのお母さま
東大文科一類1年
(麻布出身)



滝澤 祥子さま

滝澤 光太郎さんのお母さま
東京医科歯科大医1年
(筑波大学附属駒場出身)



林 士乃さま

林 ゆりさんのお母さま
東大理科一類1年
(光塩女子学院出身)

今年の保護者座談会は、『東大合格特集号』(Gno-let vol.21)にご登場いただいた、有村鉄平さん(東大理Ⅲ・立教新座)、内田未来さん(東大文Ⅰ・麻布)、滝澤光太郎さん(東京医科歯科大医・筑波大学附属駒場)、林ゆりさん(東大理Ⅰ・光塩女子学院)の保護者の皆さまにお集まりいただきました。お子さんたちのグノーブル歴は中学時代からと長く、グノで学び、グノで切磋琢磨し、グノで力をつけて、今年の春それぞれが目指した進路を、自らの手で切り拓きました。そんな子どもたちを、保護者の皆さまはどのようにサポートされたのか。そしてその間、どのようなお気持ちでグノーブルに子どもを託されていたのか。お話をうかがいました。

(取材・文：吉村高廣)

大学進学後の近況

滝澤：3月下旬から4月にかけて、いろいろな部活動を見て回っていたようです。息子は中高ずっと野球部でしたが、大学では別のことをした

いと言っていました。1か所だけですと、活動が週に2回あるかないかですので、それではちょっと物足りないということで、体育会のハンドボール部とバドミントン部の2つに入りました。また、今までは野球一筋で文化的なことをしてこなかった

ため、国際交流のサークルと救急医療研究会にも所属しています。

環境面では、今まで男子校でしたので、共学になったことで私が思う以上に大きなインパクトがあったようです。同世代の女の子たちと時間を共有することが「すごく疲れる」

などと言っていますが、これを機に、バランスのとれた大人になってほしいと思っています(笑)。何しろ今は、勉強よりも、部活や同世代の異性がある環境になじんでいこうとしている真っ最中。新しい環境の中で、自分が今まで触れてこなかったことも体験して、幅を広げていこうとしています。

林：うちは小・中・高と12年間女子校でしたが、進学した東大理Ⅰのクラスには女子が2人だけ。なので、本人は「男子校に入っちゃった」と言っています。初めのうちは「男子が皆同じに見えて、名前も覚えられない」と言っていましたが、今ではすっかり男の子ともお友達になり、楽しく過ごしているようです。

サークルはRoboTech(ロボテック)に入りまして、今年も「ABU Asia-Pacific Robot Contest(ABUアジア・太平洋ロボットコンテスト)」という世界大会で日本代表に選ばれました。3年生になった時は自分がリーダーシップを発揮して世界大会に行くという目標を持って過ごしています。

その他にもバドミントンのサークルや、幼稚園の時からバレエをやっていたこともあってダンスサークルにも入りました。ダンスサークルは、K-POPのガールズグループをコピーする女子限定のサークルで、女子校の雰囲気もあって懐かしいようです。

勉強については、高校時代から理系の科目に興味を持っていたので、大学に入って好きな科目だけ勉強すれば良いという環境がとても心地良いようです。今までは受験のために、あれもこれもやらなきゃいけない状況でしたが、これからは自分の興味のある専門的なことに専念できるという環境がうれしいようです。

有村：うちもずっと小学校から男子校でしたので、学校に女子がいるこ

とに、私の方がむしろ気を遣っています(笑)。身だしなみや洋服のことなどいろいろと言うのですが、本人は全く気にせず、いつも通り変わらず淡々と学校に行っています。

うちの息子は鉄道やアニメが大好きでして、マニア寄りな部分があります。大学では、そうした趣味を共有できる人も多いようで、自分をさらけ出して楽しむことができるようになったようです。アニメのイベントにも楽しんで行っています。今までは、周囲にあまり見せなかった自分の一面を解放できて、本人は相当気が楽になっているのではないのでしょうか。

今の大学生は私たちの学生時代よりも、宿題やレポートがすごく多いようで、最初は自転車操業のようでした。それでも、忙しいなりに充実した学生生活を送っています。

内田：うちの息子は麻布に通っていたので、中高時代がすでに大学生みたいな自由さで、大学に行って解放されたという感じは受けなかったみたいです。むしろ大学の方が、きちんと時間を守っていたりと、周りの方たちの真面目さに驚いているようです。

それと、やっぱり女子がいるので、すごくウキウキしています。初日から「女子がいる」と言って、今まで何度言っても使わなかったデオドラントスプレーも使うようになり家の中が爽やかになりました(笑)。また、高校生までは言葉遣いもいささか乱暴なところがありましたが、学校に女子がいるというだけで、家での言葉遣いも良くなったように感じます。私にとってはどちらもありがたい「女子効果」です(笑)。

親だから見えていた、 わが子の素顔

内田：一言でいうと、マイペースを極めた子でした。男の子は自分のやりたいことだけに熱中したり、集中したりしやすいとよく聞きますが、うちの子はその典型で、好きなことへ向き合う集中力は人並み外れていると感ずることがありました。

そんなタイプの子でしたから、「受験勉強も自分がやる気にならなければやらない」と言っておりまして、私も夫も中高6年間は何も口出ししませんでした。自分が納得しないと動かないことを知っていたので、見守ることに徹していました。

有村：息子は物事にあまり動じない性格です。試験の日に、夫が間違えて、予定より1時間も早く息子を起こしてしまっただけですが、本人は「それじゃあもう一度寝てくるね」といって二度寝したくらいです。それぐらいですから、受験当日ですらあまり緊張もなかったと思います。マイペースである一方、人に何か言われても自分の思いを貫くような頑な部分もありましたね。

林：うちの娘もマイペースですね。小さい頃から口数もあまり多くないマイペースな子でした。最近では、お友達ともよく話しているようなのですが、マイペースなところは変わりませんね。

滝澤：性格は、基本的に真面目で、気持ちも素直だと思うのですが、周りの意見に耳を傾ける一方で、自分が納得しなければ全く気持ちが動かないという面もあります。決めたことに対する責任感や覚悟も強いのですが、悪く言えばちょっと頑固です。その一方で、わりと楽観的な性格で、気持ちの切り替えが早いところもある子です。

グノーブルに期待していたこと

滝澤：うちは長女が先にグノーブルにお世話になっておりまして、単なる受験英語ではなく、言語として英語を学ばせていただける塾という印象をすでに持っていたんです。また、中学時代はガリガリ勉強するよりも、伸び伸び勉強していくことが息子には合っていると思っていましたし、本人のペースを守りながら勉強できるグノーブルに魅力を感じていました。小手先の勉強ではなく、最後まで自分でやり遂げるような、勉強の本質的な楽しさをグノーブルで知ってほしいと思っていました。

特に中学時代は少人数授業ということで、先生がすぐに名前を覚えてくださり、温かみを感じました。

もちろん受験のための塾ですから、最終的には点数に反映していかなければならないと思いますが、まず何より、先生との距離がとて近く、

要求にもすぐに応えてくださる環境が魅力でしたし、息子にはとても合っていたと思います。

林：娘が初等科の頃は塾に行かせず私が勉強を見ていました。その頃から、娘は理系だと感じていました。算数はどんどんと吸収していったのですが、英語に関しては少し不安があり、中学からはどこかの塾にお世話になって、しっかりとした軸をつくっていただかなければと思っていました。そうした中で、英語に定評のあるグノーブルを選びました。

「もしかしたら英語が苦手な子になるのではないかと不安でしたが、中学からグノーブルにお世話になったおかげで、英語の土台をつくっていただいたと思っています。以後、ずっと英語が得意なままで、最後の大学受験でも英語が大きな得点源になりました。

本人の一番得意な科目は、数学・物理でしたが、それでも英語を武器にして点数がとれるということは、

とても自信になっていたと思います。そういう意味でも、中学からグノーブルで楽しく勉強させていただき本当に良かったと思っています。

有村：うちの場合、英語ではなく数学からお世話になりました。それまで数学は特別得意でもなかったのですが、何しろグノーブルの数学の授業が楽しくて、どんどん力が伸びて数学が好きになったようです。

本人は、「自分の得点源は数学ではないから、足を引っ張らないようにしないと」ということを言っていたのですが、そんな息子が数学でも自信を持てたのは、中学時代からグノーブルの先生にお世話になったからだと確信しています。息子は「グノーブルの先生は、学年が変わっても、どの先生に習っても良い」と言っており、私も安心してお任せすることができました。

英語については小学校の授業でも習いましたし、夫の仕事の関係で、海外の方と接する機会もあり少し余裕があったのかもしれませんが、ただ、「大学受験をするためには、英語も塾で習わないと厳しい」と聞きましたので、数学で手応えを得ていたグノーブルでお世話になることにしました。

内田：うちは中学に入った途端に、絵に描いたような中だるみ期間に入ってしまう、全く勉強しなくなりました。定期試験の結果を私に見せなくなったところからその傾向は始まっていたのですが、学期終わりの成績表を見るとまさになぎ下がりでした(笑)。

また、自宅から学校までが少し遠く、その上、ハンドボール部とチェス部にも入っていたことで、勉強の時間もあまりとれませんでした。時間もなく、やる気もない、おまけに反抗期にも入り込んだので、家で勉強しているところを見ることがありませんでした。そんな背景もあり、

そもそも塾に「行く、行かない」の次元ではなかったのですが、突然「塾に行きたい」と本人が言い出したんです。

理由は、ハンドボール部の仲間がグノーブルの英語でお世話になっていたことと、グノーブルの英語に良い印象を持っていたことです。息子は勉強こそしていませんでしたが、英語は得意だったようで、授業を聞かなくても学校のテストはできるからと遊んでばかり。そんなタイプでしたが、どうやらお友達の宿題のお手伝いをして、いろいろな塾の英語に触れていたようなのです。その中でもグノーブルの英語は面白いと感じていたようです。

新中3の春期講習の初日を受けて、帰ってきたその日に「新学期から通いたい」と宣言しました。「グノーブルの授業は次元が違って、がんばらないといけないくらいだった」とも。ようやく「勉強しよう!」という気になったのだと私も理解しました。でもその時は、それまで勉強する気がゼロでしたので、「塾にいる時だけでも、やる気になってくれればしめたもの」という程度の期待感です。ところが実際に入塾してみたところ、先生のお話が面白く、英語で世の中のことを理解する授業がものすごく楽しいと言っていました。また、英単語の丸暗記を強要しないグノーブルの勉強法が衝撃的で、相当魅力的だったようです。

塾選びの決め手になったもの

内田：他塾については他のお母さん方からいろいろな話は聞いていました。ですが、2つの部活を掛け持ちして時間が残っていなかったため、宿題が多い塾や、拘束日が多い塾は最初から私の選択肢には入れてい



ませんでした。息子が「グノーブルに行きたい」と言い出した時、グノーブルについては反対する要素が全くありませんでした。もっとも反対しても多分聞かなかったと思います。有村：うちは附属校でしたので、むしろ受験勉強は塾がすべてという感覚があって塾選びはとて慎重に行いました。恐らく、息子よりも私の方が、塾の情報を多く持っていたと思います。

息子も夫も塾について細かく調べることはしていなかったので、私がお友達のお母さんと話しながら情報を入手していました。その時も「英語ならグノーブル」ということはよく聞いていました。ただリサーチ時の私の印象では、グノーブルは数学も良かったんです。グノーブルのことをあまり知らない方は、「グノーブル＝英語」のイメージを強く持たれているようです。それは事実ですが、すでに子どもを通わせているお母さん方からは「数学も良いから

行ってみて」という話を随分聞ききました。実際に中1になる直前のスタートダッシュ講座に行ってみたら確かに素晴らしくて、それをきっかけに受験勉強に関してはすべてグノーブルでお世話になりました。今は私も、小学生のお子さんがあるお母さんには、中1になる直前のスタートダッシュ講座から数学に通うことをおすすめしていて、事実、授業を受けられた方は「すごく良かった」とおっしゃっています。

勉強の楽しさを教えてくれる塾であることが、私が塾を選ぶ時の基準でした。ただ訓練のように宿題だけ出される塾より、学ぶことの楽しさを教えてくれる塾。ここがポイントです。息子もよく言っていました、授業の合間に先生がくださるお話が、たまらなく面白かったようです。特に中学生のうちは、そうしたワクワク感が大事だと思います。

林：塾選びは、私が主導で行っていました。娘は習い事をいろいろとし





ていましたので、週何回も通えませんが、夜寝るのがとても早い子でしたから、あまり遅くまでやる塾も困るなど考えていました。グノーブルは、授業時間も1コマ2時間とコンパクトでしたし、自宅から近いということも決め手でした。

グノーブルを知ったのは、「近くに良い塾がある」と先輩のお母さんからお聞きしたことがきっかけです。その後もネットでいろいろ調べてみて、「単語帳の丸暗記をしない」「宿題の量が多すぎない」などクチコミを見ても好感が持てました。中学から、詰め込み型の宿題を経験してしまうと、それが勉強だと思ひ違いさせてしまいそうで心配でした。ほどほどの量の宿題で、大事なところを押さえつつ、高校・大学の勉強へとつなげられることが一番理想かなと思っていました。たまたま学校のお友達何人かがスタートダッシュ講座から通っていたので、中1の夏期講習から娘に勧めてみたところ、

本人も気に入り、そのままお世話になりました。

中学生では、自分で塾を選ぶだけの知識もまだそろっていないでしょうし、娘も自分から「塾に行きたい」と主張する段階ではなかったのですが、塾探しは親の役目とっていました。ですので、子どもの性格はもちろん、塾ではどんな授業をしているのか、できるだけ詳しくリサーチすることはとても大事だと思っていました。**滝澤**：長女が通っている時にグノーブルの保護者会に行ったことがあり、そこで英語の模擬授業を拝見しました。「自分もこういうふうに習っていれば良かったのに」と、私自身が強く思ったことを記憶しています。事実、長女も「グノーブルで力がついた」と言っていましたし、息子も基礎から教えていただくこと迷うことなくグノーブルを勧めました。

今振り返りますと、「部活でたくさんになっていてもグノーブルだけ

は休まない」と息子が思っていたことには大きな意味があったと思います。そんな息子を、すごく可愛がっていただけたことはとても幸せなことだったと思います。筑駒には違う塾に行く人もいましたが、あまりのハードさに転塾してしまうケースも少なくないようでした。息子にはそうした素振りが全く見えなかったので安心していました。

もし「勉強が楽しくない」とか「もう塾には行きたくない」と言われてしまったら、そこで悩みのタネが1つ増えます。ですから、「行きなさい」と言わなくてはならない状況と、自分から「行かせてほしい」「別の科目もとらせてほしい」と言うてくることの違いはとても大きいのです。

子どもにしてみると、塾は行かされるものになりがちです。それが自分から「行きたい」と思えるためには、先生、授業内容、教材、周りのライバルなど、すべてにおいて良い環境が整っている必要がありますし、またそのような塾が良い塾だと思います。グノーブルにはその環境がありました。

グノで過ごした 中・高時代

内田：グノーブルに入ってから「ただただ楽しい」という感じでした。毎週グノーブルから帰ってくるとその日にあったことをよく話してくれました。息子が楽しそうに話してくれるのは良いことでしたが、本人が真面目に勉強に向き合っていたかどうか……正直、私は疑問に思っていました(笑)。

ターニングポイントを迎えたのは高1の終わりでした。高校生になって新しく優秀な方がたくさん入室されたこともあると思いますが、クラスが落ちてしまったんです。高2の

半ばで上のクラスに戻りましたが、その半年間は本人にとっては勉強への姿勢を変えるいい機会になったと思います。

それまでは安易な気持ちでのんびりやっていたようですが、「真面目に勉強しないとマズイ!」と気がついたようです。自覚してからは、真剣に勉強するようになりましたので、いい環境変化だったと思います。この時期によく気持ちに火がついたというところでしょうか。

高2からは国語でもお世話になりました。それまでは「国語は勉強するものではない」と豪語していましたが、お友達が受講していたこともあって、自分から「国語も受けたい」と言うてきました。“自分のやり方は間違っていないと思う。でもそれだと、時間がかかったり、追い抜かれてしまったりするかもしれない。”時として、そうした危機感が、強い主体性を育む薬にもなるのだと思います。

有村：うちは中学3年間、みっちりグノーブルでお世話になったおかげで、本当に力がつきました。同時に自信もついてきて、最初は漠然と「医学部」と言っていたのが、中学3年の頃からは「東大」という言葉が出てくるようになりました。高1からは「古文、漢文もとりたい」と言い出しました。

当時私は私立の医学部受験のつもりでいたので、当然古文、漢文は必要ないと思っていました。ところが本人は、「中学3年間で英語、数学はなんとなく見えてきたから、高1で古文、漢文をやって、その後理科に時間を費やせば東大理Ⅲもあるかもしれない」と、自分で勉強のスケジュールを立て始めたのです。本人の意志を尊重して高1から古文、漢文を受講するようにしましたが、今になればあれは本当に良かったと思っています。自主的に勉強のスケジュールを立てて、それにしっかり

取り組むようになったことのメリットは非常に大きかったです。その習慣が受験が終わるまで息子を支えたモチベーションにもなっていたように思っています。

林：中学まではただ楽しく通っていたように見えていました。小学校までは私が勉強を見ていましたが、中学からは「自分でやってね」というスタンスに変えて、私は全く見なくなって本人に任せました。なので私からすると「ただ楽しんでいるだけで大丈夫かな?」と思いつつ、見守っていたというのが正直なところなんです。

ところが高校生になって、これまで楽しく学べたおかげで、英語の力が身につけていることに気がつきました。時々、娘の部屋から音読する声が聞こえてくるのですが、「私が高1の頃はこんなにスラスラと英文を読めていなかったな」と感じて、本当に力がついたのだなと思いました。英語に限らず、中学生のうちに

どれだけ勉強が楽しいと思えるかで、そこから先の学習に取り組む姿勢が変わってくると思います。そこを上手に導いてくださったのがグノーブルでした。ですから、娘も私も、途中で塾を変えようと思ったことは一度もありませんでした。

滝澤：グノーブルでの中学時代は息子にとって、楽しく、幸せな3年間でした。高校に進学して野球が硬式になったことで練習が厳しさを増しました。それでも「グノに通っていれば大丈夫」という確信が本人にあったことが幸いでした。振替授業も大いに助かったようです。

また筑駒は、高3の11月が最後の文化祭で、1年前くらいから準備を始めるという大変な力の入れようなのですが、その時は学校生活を応援するというグノーブルの姿勢に感動しました。

文化祭直前の1か月半くらいは完全に文化祭一色になっていましたが、1つのことをやり切らないと次に進



めない息子の性格もあって、「その間は勉強はしない、ゼロでいい」という考え方でした。グノの先生方も理解してくださって、本人の生活スタイルを理解した上でアドバイスしてくださっていました。

文化祭が終わるともう受験の直前になっていましたが、私がサポートできたことは日常的な食事を作ることくらいでした。グノーブルの先生方には勉強はもちろん、メンタルの部分も支えていただいていたようです。

この6年間を振り返ると、息子の近くにはいつもグノーブルの先生方がついていてくださったように思います。中学時代はほとんど可愛がっていただいて、高校時代は大人としての向き合い方をしてくださったと感じています。進路で悩んだ時なども、息子の性格を理解した上で何日もかけてお話をしてくださったようです。

受験生ですので、もちろん勉強もしなければいけないけれど、息子にとってちゃんと相談できる大人の方がこの時期に身近にいたという点は本当に大きかったです。親がサポートできない部分を、グノーブルの先生方が見てくださっていたのだと、本当に感謝しています。

グノーブルに感じていたこと

滝澤：以前、息子は「グノの先生方は家族のようだ」と言っていました。母親は、男の子との距離感を保つのが難しい部分があります。そうした中で、父親ともまた違う、家族のように息子を見てくれる大人がいることは本当に幸せなのだなど、今改めて感じています。時には「高校の先輩が友達に相談してみたら？」という悩みもありましたが、そうしたこ

とでも「グノの先生方に相談してみる」と息子は言っていました。親以外で、しっかりと見てくださる大人がいるというのは、この時期の子どもにとってとても大事なことです。先生方は本当に大きな存在でした。

有村：私も「親以外で子どものことをしっかり見てくれる大人」という言葉に同じ気持ちです。息子は先生方に対して、「尊敬」と言うと少し遠くなってしまうのですが、家庭内では保てない絶妙な距離感で接していたように思っています。その距離感は学校の先生ともまた違うのです。大人と会話をしているのだけれども、先生が全く高姿勢でないからこそ実現できる特別な関係性。母親はそのような距離感をあまり息子とは持てないので、そこがありがたくもあり、羨ましくもありました。

内田：うちも皆さんと同じで、その時々で先生方が絶妙な距離感を持って見守ってくださっていたことに本当に感謝しています。学校でも先生方とは比較的フランクな関係を築いているようでしたが、グノーブルの先生方には、また少し違ったリスベクトの気持ちを抱いていたようです。しかもそれは特定の先生にだけではなく、どの先生に対しても息子は心

から尊敬の気持ちを持てたようで、それが親としても本当に安心でした。息子が常楽しくグノーブルに通い続けてこれたのも、尊敬できる先生方のおかげだと思います。

息子はTLP*のドイツ語クラスで、今年のお盆時期に3週間近くの研修に行き、午前はドイツ語、午後は英語で政治や文化などについてのワークショップに参加するようです。なかなかハードなスケジュールですが、グノーブルで高校3年間、少し背伸びした英語を学んできたので「なんとかなる」と感じているようです。

また、本人も私たちもその時には気づいていませんでしたが、振り返ってみると、中学から高校へと、息子の成長過程の様々な場面で、いろいろなところを支えてくださり、今の彼を形づくっていただきました。心から感謝しています。

林：娘は「グノの授業は一瞬なんだ」とよく言っていました。授業が始まったと思ったらアツという間に2時間経っていたということらしく、それくらい集中していたようです。それは、まさに自分が主体的になって授業に参加していたからだと思います。

また、学力以外にも人間性のよう



なものを伸ばしていただけたと思っています。もちろん塾の勉強は、受験勉強の一環に違いありませんが、例えば英文読解一つとってもいろいろなことを教えていただき、自ら考え、様々な知識を吸収していました。

迎えに行った帰り道では「今日はこんな話題が出てきた」「先生がこんな話をしてくれた」と、その日学んだ英文のトピックスについて教えてくれたり、「今話題になっている言葉を英語でどう言うんだよ」とうれしそうに話してくれました。そういう娘の姿を見るのが親としては心からうれしく思えましたし、彼女自身の好奇心や深く考える力を養っていただけているのだと感謝もしていました。受験のための塾でありながらも、受験勉強一辺倒にならず、学ぶ楽しさを教えてくださったところが、グノーブルの魅力だったと感じています。

受験期の子どもとの接し方

内田：息子は国立受験のみだったのですが、センター試験が見事に大失敗で、本人もものすごく落ち込んで

いました。私も点数を聞いた時は「もう浪人だな」と思ったのですが、ネガティブなことは何も言わないようにしていました。親も一緒になって落ち込んだところで良いことは何もありませんし、今まで何も口出してこなかったわけですから、その姿勢を貫きました。

本人が納得いく受験をしてくれれば、私が思い悩むことは一つもありませんから、黙って見守って、美味しいごはんを作ることに専念しました。ただ本人は、根が動かないタイプなので、「2次試験の英語で点数がとれれば、何とかなるだろう」という楽観的なプランを立てていたようです。本人がそう思うなら尊重しよう、家庭内では一切失敗には触れませんでした。

この時期はグノーブルでの直前講習を受講していたのですが、それが本当にありがたかったです。グノーブルの直前講習は普段通りのまま本番を迎えましょうというコンセプトらしく、本番直前だからといって先生方が発破をかけるということもありません。時間帯こそお昼の早い時間なのですが、いつも通りに1週間に1回授業に行って、普段と同じように真剣に演習をして楽しく解説を

聞いて、それで本番を迎えるというものです。「本番直前になって、いつもと同じでいいのかな？」と私は不安に感じたこともありましたが、本当に普段通りだったのが息子には良かったようです。

結果的には、2次の英語と国語でリカバリーでき、センター試験の失敗を取り戻すことができました。それがなければ落ちていましたね(笑)。最後に助けてくれたのは、やっぱりグノーブルだったんです。

有村：うちも普段通りが一番良いと思っていました。ただ、受験計画を立てる時、センター試験から2次試験までの期間が非常に長いので、その間どうしたものかと家族会議にもなり、私立大学の入試も受けることにしました。

息子の場合はセンター試験本番では、今までにとったことがないような良い点数がとれたので、波に乗ることができ、そのままの勢いで最後まで突っ走ることができました。

ちょうどオリンピックの時期と重なってしまっていて、試験の前日もカーリングの試合を見たりと、普段と変わらない生活をして過ごしていました。私も表向きは普段通りにしていましたが、内心ハラハラしていましたし、それでも口に出してもしようがないと思って我慢していました。

林：うちも「いつも通り」を心掛けていました。ただ、なるべく私が家を空けないようにしていました。私が家にも特別役に立つこともないのですが、コピーがほしい時など、サッと手を貸せる存在でいようと思って(笑)。センター試験で何かあるとその先が受けられなくなってしまうので、それまでは私も緊張していました。

私は緊張を表に出しているつもりはなかったのですが、後から娘に、「あの頃、ママの方が緊張してたよ



ね」と言われてしまいました(笑)。結局は私の方が普段通りではなかったみたいですよ。

本人は「いつも通りに淡々とやっていたら大丈夫だろう」という思いがあったのですが、親からすると「そうはいつでも」という思いもありました。でも、それだけ本人は自信を持っていたということでしょうね。そんな娘が、東大の2日目の試験に行く前に、私と夫に手紙をくれたんです。「大丈夫だから、安心して」という内容のもので……私も夫もうるうでした(笑)。

滝澤：うちも普段通りです、と言えれば良かったのですが、正直なところ、11月に学校の文化祭が終わってからは、息子が段々と無口になっていきました。「大丈夫かしら？」と思っていたくらいです。ただ、主人の「今まで自由にやってきたのだから、ここで勉強に力を入れずして、どこで力を入れるんだ」という言葉を私自身に言い聞かせ、ただただ見守っていました。

そんな私の気持ちを察してか、息子がこんなことを言ったことがあります。「試合中に打席が4度回ってきて、僕の場合毎回ヒットを打てない。でも1回は必ずヒットを打つタイプなんだ」と。2次試験を含め、センター試験、私立試験と、4回試験が続いていたので、絶対ヒットが出せると思っていたようです。根拠はないですが、私たちもその言葉を固く信じていました。

センター試験は思うようにいかず、落ち込みましたが、復活もわりと早かったので、毎日の食事や風邪をひかせないようサポートすることなど、ただただ見守ることに徹しました。小さい頃なら、私が手を貸せることも多かったのですが、大きくなると何もできなくなります。「ただ待つ」ということが、親にとってこれほど難しいことなのかと、あの時期は痛



切に実感させられました。待つというか、何もしない、静かなサポートは心苦しく大変です。それに耐えることが、この時期の親の役割かもしれません。

グノに子どもを託して良かった

滝澤：絶妙な距離感で子どもと接してください、そこに愛情があったこと。問題を解くことを教えるだけではなく、こちらから要望があればしっかりと応えてくださった先生方に心から感謝しています。

「僕の数学の解き方はダイナミックだと先生に言ってもらった」と息子が喜んでいました。息子の心に先生の言葉が響いたのは、先生が一人ひとりをよく見てくださって、その上で掛けてくださった言葉だったからだと思います。そうした先生方の姿勢は中学・高校と6年間変わることはなく、安心して息子を託していました。

林：中学からお世話になって良かったなと思っています。中学の頃は、量より質を重視して英語の土台、勉強に取り組む心の土台をつかってい

ただきました。その時に実感はなかったのですが、後になってこの土台のありがたさを強く感じました。1年間で3年分やってしまう塾の話も聞きますが、グノーブルでは大事な土台をきっちりつくってくださったからこそ、その後の力もうまく身についたのではないかなと思います。

また、中学生と高校生では、体力的にも違います。中学生のまだ身体ができていない時期は、がんばれる時間も高校生とは異なります。そういう点をしっかり配慮していただきながら、コンパクトな授業設定の中で、きっちりと教わるべきところを教えていただいたと思います。

有村：私も中学の時から通わせて良かったとつくづく思います。早い時期から勉強の楽しさを教えていただき、高校でその気持ちをさらに伸ばしていただいたことに本当に感謝しています。そして、先生方も皆さん素晴らしかったと思います。息子自身も、数学、英語、国語、また季節講習でお世話になった理科、「どの先生も良かった」と言っていました。

他の塾を選ぶという選択肢がある中で、周りの皆さんも同じようにグノーブルを選んで通っているということもあり、子ども同士の仲も良かつ

たようです。同じ考え方・価値観を持ち、グノーブルが好きで集まっているからこそ、打ち解け合える関係が築けたのではないのでしょうか。

内田：先生方や生徒さん、皆さん本当に素晴らしくて、私の中では「第二の学校」のように感じていました。息子は中学に入ってから全く勉強に熱意を持ってない時期を過ごしていましたから、グノーブルとの出会いがなかったら今の大学生活はまずなかったでしょう。グノーブルこそが運命の分かれ道の一つだったと思っています。

お子さんが受験を迎える方に

内田：子どもを信じることです。うちの息子は信じるには難しいタイプだったのですが(笑)、親が信じずして誰か信じてくれるのか、くらいの気持ちで向き合う努力から始めました。信じていくうちに本人も変わっていくものです。子どもは、周りの方の影響を受けて、あっちこっちにぶつかりながら成長していくものなので、親の方が右往左往せずにどしどしと構えた姿を見せることが大事

だと思います。

そして繰り返しにはなりますが、グノーブルは先生方が素晴らしかったので、あまり迷うこともなくお任せして、なんとか我が家もここまで来ることができました。グノーブルにお世話になったら、子どもと先生を信じるのが大切だと思います。

有村：グノーブルは子どものやる気を引き出して、勉強の楽しさを教えてくれる塾ですので、安心して先生方にお任せしていました。中学時代は、授業時間の短さや宿題の少なさに、私が少し不安になった時期もありましたが、結果的に問題ありませんでしたし、むしろ勉強だけではなく、中学から高校への成長過程で身につけるべき大事なものを教えていただいたと思っています。グノーブルで間違いありませんでした。

林：私も最後までグノーブルを信じていけばいいと思います。生徒が自分で作る英語の「語源ノート」というものがあります。娘と一緒にそのノートを買いに行った時、娘が「これはずっと使うからいいノートを選ばなくちゃ」と言って少し高めのノートを買いました。その時の娘はとっても楽しそうでした。そうした些細なことでも楽しみに変えていく



ことが大事だと思います。

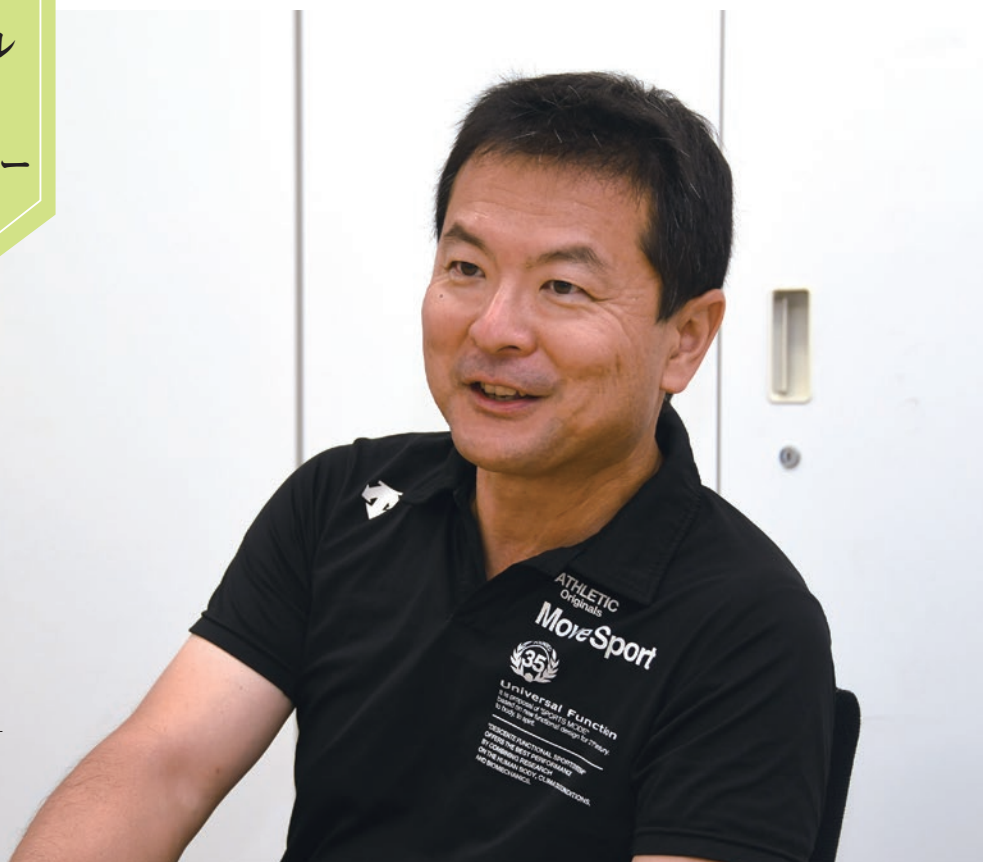
滝澤：受験は本人が納得して決めていくことだと思うので、本人を信じて、先生方を信じてサポートしていくことが親の役割だと思います。

うちの息子は、事細かに話すタイプではありませんでしたので、たまにはこちらから様子を聞いてみたり、お節介にならない程度にサポートをしてあげることも大切だと思います。

また、何かを「しなさい」と言いたくなくても、そこは一旦飲み込んで、こちらからは選択肢を出すぐらいが良いと思います。結果的に自分で選んだことは能動的にやるでしょうから、それを信じるのが大事です。

グノーブル
先輩
インタビュー

かちよしのり
可知 芳則さん
 整形外科医
 スポーツドクター



仕事でも、勉強でも、環境にめぐまれるとやる気も湧くしがんばり抜けると思います。

近年、医療の分野は細分化され、様々な分野で“専門医”と呼ばれる医師が増えています。整形外科の分野でも、スポーツ医療の専門性を高め、アスリートが故障した時やケガをした時に治療に当たり、健康管理などを行う“スポーツドクター”が活躍しています。

中学時代に中山先生に教わった可知芳則さんも、そんなスポーツドクターのおひとり。高島平中央総合病院整形外科のスポーツ整形医として勤務する傍ら、一般財団法人全日本野球協会や侍ジャパン（野球日本代表チーム）のドクターとして、WBC（ワールド・ベースボール・クラシック）に帯同するなど第一線で活躍されています。今回、可知さんをお招きして、お話を伺いました。

医師は「野球に関わる仕事に就く」ための手段

私は小学生の頃からプロ野球選手を目指して野球をしていました。成長していく中で自分の実力を客観的に評価できるようになりますから、

途中からは現実的に厳しいことは悟りましたが、大学進学の際には結構本気で「東大の野球部で少しでも目立てば、話題性でプロへの道も開けるのでは」と考えたりもしました。

高校卒業後は東京大学理科一類に進学し、在学中は東京六大学理工系

硬式野球リーグで野球を続けたのですが、就職活動の時期が近づいてきた時に「できることなら何らかの形で野球に関わる仕事に就けなにか」と考えました。

ちょうどその頃、アメリカで肘の手術を受けた村田兆治投手というブ

口野球・ロッテオリオンズ（現・千葉ロッテマリーンズ）のエースが見事に復活を遂げ、その執刀医であるフランク・ジョーブ博士の名前が頻繁に報道されていました。スポーツ医学とかチームドクターといった当時なじみの薄かった言葉を知るとともに、「この仕事なら野球にずっと関われる！」と思ったのが、医師になることを決意したきっかけでした。

少しつけ足すと、東大には運動生理学とか体育学を研究する学科もありますが、そこに進学した野球部の仲間からの「指導教官の多くが医者だから、今から来るなら医者になった方がいい」という助言にも背中を押しもらって、千葉大学医学部に入り直しました。しかし現在、仕事に関わる医師の中には東大のその学科を出てから医者になった方も多くいて、結局同じところに行きつくのだなあと思いました。

さて一般的な整形外科医とスポーツ整形外科医の違いですが、実はきれいに分かれているわけではありません。病院での診療に際してスポーツ整形では、アスリートやスポーツ復帰を強く希望している人をメインに診るといっただけで、他の症状の患者さんの診療もします。そして、スポーツ整形の専門医がいる病院はまだ多くないのも事実で、それには病院の経営的な側面も一因となっています。

というのもアスリートは、ケガが治っただけではまだ不十分で元のパフォーマンスが発揮できるようになることを求めてきますから、当然一般の患者さんよりも要求が高くなりますし、診療にも時間がかかります。したがって、病院によってはアスリートを時間と手間のかかる患者さんと捉えることもあり、現在の制度ではスポーツドクターを置くことに積極的ではない病院も多いのです。

そんな現状を変えていくのも、今スポーツドクターとして仕事をしている私たちの任務だと思います。

病院勤務と野球のフィールドの二刀流

今は、病院勤務の他に、全日本野球協会などにも所属して活動しており、WBCをはじめとした野球の国際大会の帯同ドクターを務めることもあります。これは、10年ほど前に私を指導してくださった先生に、声をかけていただいたのが始まりです。

代表チームに帯同すれば、長い時だと2、3週間は病院を留守にしなければなりません。ですからチームドクターの仕事をするためには病院の理解が必要です。その点、今の病院は競技のフィールドで関わった選手が患者さんとして受診してくれたり、指導者の方が「可知先生のところへ行って診てもらいなさい」と言ってくれたりする点を評価してくれていて、「誰もがができる仕事ではないから、ぜひやってください」とバックアップしていただけいています。

病院の仕事との両立は確かに大変な部分もありますが、スポーツドクターと呼ばれる人は私に限らず多くの方が、何とか調整をつけてやっていると思います。私としては、病院に来たアスリートを治療するだけではなく、チームのサポートや現場の仕事することに価値を見いだしているのも、多少思いきった考えですが、それで病院が「迷惑だから辞めてくれ」と言うのなら、「それも仕方がない。もしそうなったとしても自分の仕事ができる他の場所を探すまで」と覚悟しています。私の周りにはスポーツドクターには、同じような気持ちで働いている人が何人かいます。

大人の言葉をうのみにせず自分で考える

今の自分が形成された過程を振り返ってみると、中3の時に通ったグノーブルの前身になる塾で、中山先生に出会えたことが少なからず人生に影響しています。

当時は開成高校を目指して塾に通っていたので、当然勉強を教わっていたんですけど、勉強だけでなく、ものの考え方や生きていく上でのいろいろな価値観のようなものも教えてもらったと思っています。

抽象的な表現になってしまいますが、「人に言われたことをそのまま受け入れるのではなく、人はこう言っているけど、自分でまずそれについて考えてみる。その上で合っている、合っていないは別にして、自分なりの答えとか、今の自分はこう思う、というのを考えながら前に進んでいくのが大事だ」ということを15歳の時に教えてもらいました。

ちょうどいいタイミングで尊敬できる大人に出会えたのだと思います。大人の言うことをうのみにしていた部分も多かった小学生時代から段々「大人も間違ふことがあるんじゃないか？」って気づき始める頃じゃないですか、中学生って。そんな時に、ちゃんと向き合ってくれて、中学生が自分の頭で考えることを応援してくれる大人に出会えたというのはありがたいことですね。

その頃私は、埼玉の北本という、大宮よりもさらに電車で5つ北に行ったところに住んでいたんですが、当時の塾まで1時間半ぐらいかけて通っていました。4時半の電車に乗って、5時20分ぐらいに上野に着いて、日比谷線に乗り換えて、塾に着くとちょうど授業の20分前か15分前くらい。でも、授業が本当に楽しみだったので週3回の通塾をさほど大変だとは思いませんでした。

実は中学受験で開成に落ちて、それが悔しくて、高校は絶対に開成へ行きたいと思っていたんです。中1から地元の塾に通って、成績も安定していたのですが、埼玉の塾では「開成高校は難しいからどんなに成績が良くても確実とは言えない」と言われ、「そんなもんなんだ、どうしたものかな」と思っていた時、塾に置いてあった『高校への数学』の広告で、中山先生が英語を指導していた塾のことを知ったんです。何とその塾は開成高校に何十人も合格している。「そんなに受かる塾があるのに、塾でトップの生徒を確実に合格させられないところに通い続けて良いのか？」と子どもだって思うじゃないですか。さらにその広告には、自分の家よりずっと遠い埼玉県深谷市から急行に乗って通った生徒が灘高校に合格したという話が載っていて、「それなら俺も通えるじゃないか」と思ったんです。

生徒の目線に合わせてくれた先生

通い始めた東京の塾には受験勉強にとどまらない刺激があり、今はやりのチョコちゃんではありませんが、「勉強ばかりしてんじゃねえよ」みたいな雰囲気がありました。夏休みには、中山先生と「昨日、腕立て何回やった？」と競争してみたり、洋楽の話で盛り上がりたり(笑)。私はビートルズも知らない田舎の中学生だったので、その塾で知り合った友達に頼んで、レコードを貸してもらったりと、勉強、勉強じゃないところが良かったですね。その一方で、授業レベルは高いし、授業中は皆が集中して空気が引き締まっています。オンとオフの切り替えがはっきりしていたと思います。

先生はもちろん大人でしたが、上からものを言うようなこともなく、

勉強以外のいろいろなことを教えてくださいました。生徒たちを子ども扱いするのではなく、お客さん扱いをするわけでもなく接していただけたことは、その後の人との接し方にも大きく影響しています。

そんな1年を過ごし、無事、開成高校に合格することができました。

チャンスに備えて技量を磨く

研修医になった当初は、目の前の仕事を身につけていくことに精いっぱい野球どころではありませんでした。まず、医者として一人前にならないと話になりません。野球の現場にどうにかして行きたいなどと考える余裕が出てきたのは、5、6年経ってからでしょうか。「このままじゃ一般の整形外科医の道だけになってしまうから、何とかしなければ」と考えて、まず公益財団法人日本スポーツ協会(旧・日本体育協会)のスポーツドクターの資格を取って、そこから道を開いていくことにしました。

実はスポーツドクターというのは、決められた講習を受けて、資格が認定されれば名乗ることができます。ところが、資格がもらえたからといってスポーツの現場での仕事が舞い込んでくるわけでもなく、すぐにアスリートが患者さんとしてやってくるわけでもありません。スポーツの現場に出て仕事をするためには人脈も必要ですし、患者さんに来てもらうためには選手や指導者の信頼を得て、クチコミで勧めてもらえるようになる必要があります。

そしてフィールドでの仕事を任せられるチャンスが来た時に、相手の期待に応えられなければ、次はありません。したがって、それまでには相応の技量を身につけ、それを磨いて

おかなければなりません。ではその技量はどう身につけるのか。それは日々の仕事以外にありえません。

たまに、スポーツの仕事をしたという若い先生から、「どうしたらいいですか?」と聞かれます。そうした時は、「チャンスは突然やってくる。その1回を逃したら次がないかもしれない。だからその時に備えて整形外科医としての技量を磨いておくことが大切だ」とアドバイスしています。

極端な話、何もできない頃に大きなチャンスが舞い込んできて、もし現場であたふたしていたら「この人使えないね」って評価されてしまう。そこから挽回するのはすごく大変です。もちろん医師としての知識・技量を上げていくには年数がかかります。だからこそ具体的なめどが立ってなくても、いつかやってくるその日に備えて、整形外科医としての技量を、日々磨いておく必要があるのです。

新たな学びには、新しい可能性がある

とはいえ、私も医者になってからずっと、24時間365日、スポーツドクターのことばかり考えていたかという、必ずしもそうではありません。

研修医の2年間を過ごした病院では、すごく親身に指導して下さった脊椎外科を専門とする先生がいました。脊椎外科というのは、診断学といってどこが悪いからこういう症状が出ていて、そこを解決してあげたら今困っている症状が消えるという「原因と結果」が明確な部分のある非常に面白い診療分野です。しっかり診断をつけて手術をすれば、嘘のように症状が良くなることに魅力を感じましたし、先輩方がとても格好良く見えました。

脊椎外科で実績のある病院でしたし、「先生のような脊椎外科医になるのかな」と言ったこともありましたが、その先生からは「スポーツドクターになるって言っていたのに、それはどうするんだ。脊椎外科は向かないから私が認めない。スポーツをやいなさい」と、喜んでいいのか落ち込むべきなのか悩むアドバイスをいただいて、迷いを断ち切ったこともありました。

その後も整形外科医としてキャリアを重ねる中では人工関節をたくさん手術した時期もありました。膝の悪い高齢の患者さんが手術を受けて旅行にも行けるようになったりすると、患者さんも喜んでくれます。「ずっと先生、私のこと診て下さいね」なんて言われれば当然のことながらこちらもうれしい。「もちろん、ちゃんと面倒見ますよ」と答えましたし、今でも私の外来に通って来てくれる人もいます。ただ、この先ずっと人工関節の手術を手がけて、その道のスペシャリストを目指すということにはならないと思います。

医師の場合、ある程度成長するまでに身につけなければいけないこと、経験しなければならぬことが実にたくさんありますし、その後も常に勉強が続く仕事です。しかし、少し余裕が出てきてからは、新たなことを勉強していくのは本当に面白いものです。違った可能性が見えるだけに心も揺らぎます。私は結果的に初志を貫いていますが、仮に多くの勉強の末、進む道が変わっても構わないと思います。

医療現場も塾も環境次第で人は変わる

これは医師に限らないと思いますが、職業によってはプロとしての技量を磨くために楽しいことばかりではなく、時には苦しいことやつらい



ことも経験しなければいけません。またそれとは別に、思うように技量を身につける環境がないといった問題もあります。

私が研修医の時は、自分の予定が空いている日には病院に泊まって、救急外来のファーストコールには自分を選んでもらうよう看護師さんに頼んでいた時期がありました。経験回数をとにかく増やして、様々な症例にどのような処置をすればいいか学ぶために自主的にとり入れた方法です。指導医の先生にとっては自分一人で仕事を片づけた方がスムーズだったのかもしれませんが、嫌な顔などせず、夜中に指導していただきとても感謝しています。

ところが最近の研修医を見ていると少々心配になることもあります。ある時、通常業務時間が終わる間際に、救急隊から「開放骨折の患者さんを先生のところで診てもらえますか」と連絡が入ったことがありました。開放骨折の場合、迅速に手術に取り掛かる必要があります。連絡を受けた時点で手術の手順をいろいろと考えながら、研修医に「今から開

放骨折の患者さんが来るから、先生に受け持ちしてもらって一緒に手術しようか」と声をかけたら、「今日はちょっと用事があるので、またの機会に」って。

このような例は実は時々あります。「若い時の苦労は買ってでもしろ」という故事は、今の若い世代には広がっていないのかもしれませんが、将来医師になりたいと思っている人には、いずれどのような医師になるのかにかかわらず一人前になるまでは苦勞はいとわれない、そして自分で考える力のある大人になってほしいと思います。

ただ、そういうふうには思わせてあげられなかった自分にも反省点があるだろうと思います。若い頃とはとにかく経験が大事だというのは、医者になれば誰でもわかると思いますが、でもそれには環境も大事です。経験を求めて仲間内で競い合える良い環境ができていれば、自然と皆が切磋琢磨していくようになると思うんです。

それは多分、私が通っていた塾でも、今のグノーブルでも、本質は一

緒なんじゃないかと思えます。私が塾に通っていた頃は、英語が得意ではなかったで、毎回ひいひい言っていました。でも、復習や宿題を怠って次の授業に参加しても、その授業で身につくことがごく減ってしまいます。それがどうしても嫌でしたし、周りの友達が皆わかっている、自分だけがわからないのも嫌でした。何より密度の濃い授業を無駄にしたくなかったから、絶対前向きに勉強に取り組もうと思っていました。結果としてやり抜けたのは自分から行きたくなる環境がそこにあったからだと思えます。環境にめぐまれるとやる気も湧くしがんばり抜けるということは大いにあると思えます。

日本にはスポーツ文化がまだ根づいていない

医学の世界は日進月歩ですが、スポーツ医学については、結構日本は先進的なことをやっていると思えます。ただ、世界の共通言語は英語ですから、よく言われる話ではありますが、日本の医学会にはハンディが



あります。日本語で論文を書いてもそれを世界中で読んでもらうことはできないからです。

そのため世界的にはまだ評価されていないという部分はありますが、現在の日本の医療レベルはスポーツ医学の分野でも間違いなく最先端の一翼を担っていると思えます。少なくとも20年前のように、「アメリカが最先端で、日本は遅れている」というようなことはありません。

この先2020年の東京五輪を契機として、恐らくスポーツドクターの需要は増えていくと思えますが、もっと本質的な部分で、諸外国と同じようにスポーツも文化の一つとして成熟していく必要があります。そのためには、今の子どもたちが多様なスポーツで活躍することを応援していく場がなくてはなりませんし、今よりもっとアスリートが社会的に認められなくてはならないと思えます。

画家や音楽家などの芸術家が社会的に認められているのは、その人の作品が多くの人に感動を与えるからに他なりません。アスリートも同じ

ような役割を果たしているはずなのに、現在の日本ではアスリートは一段低く見られているように思うことがあります。そのあたりの底上げがないと、スポーツドクターの需要はもとより、アスリートが活躍できる環境も整わないし、選手寿命も延びていかないと思えます。

例えば絵が好きで、将来はその道で自分の作品を作りたいと思ってがんばっている人が、病気やケガで創作活動に支障が生じた時、簡単に「絵なんかやめて違う仕事に進みなよ」とは言えないと思えます。ところがスポーツの世界では、そういうことがまだ普通に起こりえますし、ケガで将来をあきらめる若いアスリートがたくさんいます。

私たちスポーツドクターは、将来のアスリートをケガから守るための活動もしていて、具体的には指導者に対して障害予防の講演会を行ったり、理学療法士やアスレチックトレーナーと協力して強化プログラムを考案したりしていますが、十分な成果を上げているとはまだ言えません。スポーツが文化として成熟していくためには、ひとつにはスポーツドクター以外の医者の認識を変える必要がありますし、スポーツをやっている側——特に指導者の意識を変えていく必要もあります。何より、アスリートを取り巻く社会的な環境が変わることが大切だと思います。

Gnoble Teachers' Voice



企画部長

関田裕一(英語科)

4技能で問われる英語力より、一段高い次元の力を育む。

街を歩いても、多くの外国人を見かけるようになった日本。2020年の東京五輪をピークに、その数はさらに増えることは間違いありません。こうした社会事情も後押しして、「国内外でのグローバル化に備えるため」という理由から、日本人の英語力が改めて見直され、大学入試では、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能評価にさらに関心が寄せられています。まだまだ制度の改善点はあるものの、目を追うごとに、いざさか煽り気味のマスコミ報道の数も増えつつあります。こうした現状に右往左往することなく、2006年の開校以来、「将来に役立つ英語力」を標榜してきたグノーブルの指導方針に則った学習を続けることの正しさと大切さは、レベルの高い英語力を身につけて活躍している多くの卒業生たちの存在によっても証明されています。大学受験グノーブル企画部長(英語担当)の関田裕一先生に、4技能評価への向き合い方、英語を学ぶ本質、力を伸ばすグノーブルの独自性などについてお話を伺いました。

「BICS」と「CALP」

編集部: 大学入学共通テストの4技能評価について、いかがお考えでしょうか。

関田: 文部科学省をはじめとして、より高い英語力を議論している方々はBICSとCALP*の区別をしていないのではないかと感じます。「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を身につけることの大切さといっても、BICSと

CALPをごちゃまぜにして組上に載せているように思えます。

一般的に「使える英語」と言われるのは、日常的なコミュニケーションを英語でとることができるBICSのことです。英語で挨拶をしたり、近況を報告したり、買い物ができたりといった能力を身につけることを目標とします。

しかし、大学側が入試で求めている英語の力は、明確にCALPの方です。つまり、高度かつ学問的であり、往々に

*バイリンガル教育の理論的基礎を築いたトロント大学オントリオ教育大学院教授ジム・カミンズ(Jim Cummins)による言語能力の区別。BICS(Basic Interpersonal Communicative Skills)は「基本的な対人伝達能力」で、相手が目の前にいることを前提とする言語能力。CALP(Cognitive Academic Language Proficiency)は「認知的・学問的な言語能力」で、仮説を立てる、推論する、論理を組み立てるなど、抽象的で高度な言語能力をいう。

して抽象的である事柄について、英語で文献を読み、理解して、自分の言葉に直して検証する。それを論文などの文章にしたために公表する、あるいはプレゼンテーションする。そのようなことを英語のできる素養があるかを大学は問うているのです。

編集部：それは、4技能評価で求められる「使える英語」と、グノーブルが標榜してきた「将来に役立つ英語力」とは違うということでしょうか。

関田：「違う」というより、我々はBICSとCALPの違いを明確に意識しており、難関大学の入試で問われる力はCALPであるという認識を持っているということです。その上で、その力を伸ばすために、どのように生徒のお手伝いをすべきかを考えてきました。しかしながら、多くの方がその2つがあることを認識せずにこのことを論じ、入試制度改革に慌てふためいているような印象が拭えません。

編集部：しかしテストで「話す」「書く」が問われるようになれば、ごく単純に不安を感じる人も多いと思いますが。

関田：その不安を解消するために、日本人が外国語である英語を学習していく上でとても参考になる学問があります。

「Second Language Acquisition（第二言語習得）」という学問分野で、1960年代末くらいから研究され始めた応用言語学の一分野です。第二言語の学習がどのようなメカニズムで進むのかを研究している学問で、私たちが大変注目しています。

その研究では、第二言語を習得するためには「理解を伴う大量のインプット（聞く&読む）」が必要だと明らかにしています。“理解を伴う”という点が重要で、「門前の小僧習わぬ経を読む」ではなく、しっかりとわかっているということが前提です。

それに加えて、「少し背伸びをした少量のアウトプット（話す&書く）」も必要です。ただし、こちらは“少量”が良いのです。

「これは英語でなんて言うのだろう」「これは英文ではどう書けば通じるのだろう」ということを、少し背伸びをしてアウトプットする練習をしてみる。このような大量のインプットと少量のアウトプットの2つが車の両輪となり、継続していくことによって、外国語としての英語は習得できるようになるというのが結論です。

グノーブルが取り組んでいることは、まさにこのことです。インプットとして大量の英文を読み、リベラルアーツといわれるような古典的なものから、新しい学問的な成果、時事的な話題なども含めて、とにかく知的に興味深いと思ってもらえるような題材を入念に準備しています。

しかし、アウトプットとインプットの量を逆にしたのでは、苦勞ばかりが多くて効果の上がらない練習を重ね

ることになります。ネイティブの先生との会話をただ重ねても、英語がなかなか上達しないという苦い経験は、これまで多くの学習者が繰り返してきたのではないのでしょうか。まずは英文法の土台をつくり上げた上に、興味を持てる多くのインプットを積み重ねていくことが大切なのです。

少し脱線してしましますが、我々グノーブルの講師の仕事には、「面白いから見てみない？ 読んでみない？ 聞いてみない？」というキュレーターのような側面があると思います。彼らが美術館で展覧会を企画する時に「こんなに面白いものがある。たくさん集めて、お客さんに鑑賞してもらおう」と考えるのにも似た発想で、我々は教材を作っています。

それを授業で提供し、内容をより深いところまで理解してもらえるように、入念な準備をして授業に臨みます。そして、生徒が深いところまでわかったならば、今度は音を使って何度も繰り返し聞くことで“大量のインプット”を行ってもらいます。さらに、自分で声に出してみるというワークアウト方法（音声トレーニング）も確立していますし、英作文の添削指導も日常的に行っていますから、アウトプットにも事欠きません。「理解を伴う大量のインプット（聞く&読む）×少し背伸びをした少量のアウトプット（話す&書く）」を、授業→復習→ワークアウトという形で実現する、これが2006年のグノーブル開校以来変わらない英語科のスタンスです。



なぜ、英語を学ぶのか

編集部：4技能評価を視野に入れた学習指導を新たに開始して、喧伝している塾や学校も増えているようですが、グノーブルとしてはどのようにお考えですか。

関田：試験で測られる英語は、あくまでも英語力のほんの一面面でしかありません。ですから、試験で問われるから試験に合わせて勉強しようというよりも、「自分は将来こういうことをしたい、こういう分野に関心があるから、そのために必要な英語の能力を身につけていくんだ」という英語の勉強の仕方が理想です。

試験の対策としてテクニックを磨いたり、試験慣れすることも、ある程度は必要なことですが、グノーブルとしては、ひとつの試験で点数をとるために英語の指導をしていると思ったことは一度もありません。ですから「東京大学専門」とも「医学部専門」とも謳ってはいないのです。

英語については、ひとつの教室の中に東京大学志望者もいれば、医学部志望者もいますし、早慶上智などが第一志望だという生徒もいます。志望する大学は違うし、受ける試験も違いますが、共通していることは英語力を上げたいということなのです。日常生活で英語を「聞く」「話す」「読む」「書く」力を身につけるだけで終わらずに、それより一段高い力を育むことに力を注いでいきたいと考えています。

編集部：では、改めて4技能対策のために指導方法を変える必要はないとお考えなのですね。

関田：というよりも、グノーブルでは2006年から一貫して4技能を伸ばす対策を行ってきたのです。現カリキュラムでも4技能の向上にはお役に立てていると自負しています。それゆえ、結果的にということになりますが、これからも高等教育を受ける下地がしっかりと整うように、CALPを念頭に置いた4技能向上のお手伝いを続けていきます。

ただし、小学生から英語が正規教科として導入されることによって、グノーブルにおいても中学1・2年生の英語のカリキュラムは大きく組み直す必要があります。例えば、現在の新中学1年生の「スタートダッシュ講座」ではアルファベットの読み書きから始めています。小学校で教科化されれば、このカリキュラムは当然変更することになります。

実は、現状の「スタートダッシュ講座」でも、アメリカに3年間住んでいた英検準1級をすでに取得済みの生徒からも、「面白かった」という声をいただいたことがあります。恐らく、これまでの勉強方法とはひと味違う、グノーブル独自のアプローチを面白く感じていただけたのだと思います。そのような強みは残しつつ、小学校の学習指

導要領の変更に伴って、グノーブルの教材カリキュラムの変えるべきところは変えていきます。すでに英語科で準備を進めています。

幼少期からの英語学習

編集部：今おっしゃった小学校の英語教育ですが、2020年度から小学3・4年生が必修、5・6年生は成績評価の対象になることが決まりました。子どもたちの英語力のボトムアップにつながるのでしょうか。

関田：この場合、BICSは上がると思います。効果的な指導方針のもと、早く始めた分だけ、向上が期待できます。しかしCALPの向上は望みません。

理由は、母語ですら抽象的なことを理解できないのに、外国語でそれを理解できるわけがないからです。算数と数学の違いを考えればわかりやすいと思いますが、初等教育の段階では、抽象的な概念を本格的には扱いません。CALPの向上は、中等教育の段階になってからの教育にかかっていると言えます。

また、幼少期から英語を学ぶことによる母語に与える影響も考えなくてはなりません。抽象的な概念や、複雑な論理を扱うには、土台としての言語運用能力がしっかりしていなければいけません。第二言語の能力を上げるには、土台としての母語をちゃんと育てている必要があります。

幼少期から母語である日本語をしっかり整えつつ、一方で第二言語としての英語はBICSを楽しく身につけていくことを目指すのがいいでしょう。

編集部：そうした場を提供しているのがグノキッズと考えて良いのでしょうか。

関田：そうです。グノキッズはまさに、幼少期からBICSを身につけていこうという塾です。英語を学ぶ、という意識ではなく、早いうちから実体験を通して英語に親しむ、なじんでいくということには有意義です。常にネイティブの講師が2人いて、彼ら、彼女らの自然なやり取りを幼少期からそばで耳にすることができる、目にすることができるというのは得難い経験だと思います。インプットを最大化して、その上で心地良くアウトプットをできる環境を提供しているのがグノキッズです。

編集部：帰国生にも同じことが言えるのでしょうか。グノーブルでは帰国生も多く英語を学んでいますよね。

関田：彼らがなぜグノーブルに通うのかというと、いざ受験を目の前にすると相当高度な知識が必要であり、さらには高度な論理力も必要で、その背景となる教養レベルの知識も必要だからです。

帰国生が、東京大学や一橋大学、京都大学などで問わ

れるような、研究者や文筆家たちの知的レベルの高い英文を正しく読めるかという、必ずしもそうではありません。読めている、わかっているつもりでも、それはあくまで“つもり”でしかなくて、深いところまでは全く読めていないことが多いのです。帰国生の流暢な英語力に深みを与えていく役割を、グノーブルの授業は果たしています。

基礎固めのサポート講座

編集部：その他、グノーブルならではの英語学習への取り組みはどのようなものがありますか。

関田：受験生向けに季節講習で開講している「センター発音対策講座」という講座があります。ここ数年、センター試験で発音アクセントの問題が200点中14点分出ています。2点×7題です。その14点がとれないという生徒が意外と多いのです。

国公立医学部など、センター試験のウエイトが高い大学を志望する場合は限りなく200点に近い点数をとった方が良いでしょうから、そういう生徒たちのためにも、たった2日の講座ですが毎年開催しており、そのたびに「面白かった」「すごく役に立った」「こんなこと教わったことなかった」と言ってもらえます。

タネを明かすと、この講座は新中学1年生の「スタートダッシュ講座」の応用なのです。つまり、小学校6年生の2～3月にグノーブルで学んでいることを、6年後の受験学年に学んで「役に立った」と言ってもらえる現実があるのです。ですから、早くからグノーブルに通っていただければ、というのが本音です。新中学1年生の時に楽しく学べることを、センター試験で点をとるために6年後に勉強するのはもったいないとも考えられます。

編集部：グノーブル独自の講座としては「EGGS」という講座がありますが、これはどのような内容のカリキュラムでしょうか。

関田：高校生になってからグノーブルの門を叩かれる方が多かったことがきっかけで生まれました。グノーブルの入室テストで、残念ながら基準点に達しない、あるいは入室テストに何とか合格したものの文法を体系立てて学んだことがないという生徒が多かったものから、「駆け込み寺」的な位置づけで作った講座なのです。

60ページに満たないテキスト分量ですが、英語を「読んで書ける」という土台をつくるためには、文法はこれだけ理解していれば大丈夫という内容です。説明には365本の例文がついていて、すべてが音声教材GSL*に対応しています。

ただ、お役に立っているのはうれしいのですが、中学生

のうちからグノーブルのカリキュラムと教材をペースメーカーにしながら、グノーブルの復習と学校の勉強をしていれば、英語はできるようになります。4回プラスその後の7回、計11回で力がつくのは画期的な講座と言えますが、高校生になって駆け込むより、中学生のうちからグノーブルを利用していただければ幸いです。

ひと言つけ加えておきますと、英文法の土台は、高度な英語力を組み上げるための基盤になります。英文法をないがしろにして、ネイティブと会話をしていけば英語ができるようになるとか、英単語帳を覚えれば英文が読めるようになるというのは残念ながら幻想にすぎません。

英語力が伸びる裏づけ

編集部：英語力を伸ばす上で、授業以外の学習ではどのようなアドバイスをされていますか。

関田：まず、音読をおすすめしています。音読に関しては、グノーブルに入塾するまで学習経験がない生徒もいます。

かつて、ある生徒から、英語ができるようになりたいが、具体的に何をしたら良いかわからないという相談を受けました。その生徒さんは中高一貫校の中2生で、当時は文法の問題集を自習教材として使っていましたが、無味乾燥に問題が並んでいるばかりで勉強が面白くないと感じていたようです。そこで、音読の正しいやり方をアドバイスしました。

そして高校2年生の夏に久しぶりに話した時に、グノーブルに通い始めて4年目にして音読に取り組むようになったと聞きました。ところがその後の成績が安定しません。理由は時々音読をするものの習慣にできていなかったからです。

高校3年生の夏にもう一度話した時は「今はちゃんと取り組めていて、しかも継続できています」と手ごたえを話してくれました。効果もしっかり実感できていたようで「自分の中で英語の読み方が変わってきたような印象がある」と言っており、志望していた東京大学にも無事に合格しました。つまり、4年間きちんと音読をやっていた方でも、5年目にしっかりとやれば効果を発揮することもあるのです。

そのガイドとなるのがGSLです。この音声教材のワークアウトを続けることにより、英語をその語順のまま素早く解釈でき、自然な英文が書ける土台を築くことができます。すでにグノーブルの英語を代表する教材として愛されているGSLですが、この耳と口を鍛えるという学習方法は、今後も変わらないグノーブルのアドバンテージとして残り続けていくと思います。耳と口を鍛えるのは本当に大



切です。

授業で理解できたことを「聞く」、声に出して「読む」ということを、何度も何度も、同じ題材で構わないのでインプットとアウトプットを繰り返すことによって、脳に英語の思考回路が組み上がっていくのです。

脱・単語帳信仰

編集部：英語の受験学習では、英単語は丸暗記が前提になっていますがグノーブルはそれをしませんね。

関田：むしろ何故これほど単語帳がはやるのか、本当に疑問です。単語帳を持っている生徒に「なんでそれ使っているの?」と聞くと、「英語を読んでいて知らない言葉が出てくるから」と言うのです。

「泳げるようになりたい人がいたら、君はどんなアドバイスをします?」と聞くと、「プールに入って泳ごう」と答えます。まさにその通りで、泳げるようになりたい人に、腹筋運動や腕立て伏せや筋トレをしようなんて言わないわけです。泳げるようになりたかったら、「まず泳げ」です。同じように、英語を読めるようになりたかったら、まず英語を読むことです。「ここに教材があるんだから、読めばいいじゃない」という話をします。

単語帳は、日本語と英語を対にして覚えるようにできています。しかしながら、英文の中には単語帳に載っていない意味がいっぱい出てきます。ある言葉がどのような意味で使われているのか、それは文の中に入って初めて決まるのです。だからこそ、文章の中で出合った文脈上の語の意

味を、語の成り立ちからひとつずつ身につけていきましょう、というアプローチを私たちはとっているのです。

語の成り立ちから学ぶことができれば、まず第一に楽しく、ちょっとした感動すら覚えながら学べます。例えば、expectはexが「外」、spectが「見る」です。「誰か来ないかな」と外を見るから「～を期待する」、「誰かが来るかもしれない」と外を見るから「～を予想する」という話だけでも、少し「へえ」とか「なるほど」と思えます。respectはre「振り返って」spect「見る」ですから、「おお、あの人だ」と尊敬する人を振り返って見る感じがよく表れている単語です。

どの英単語にも表情があります。それを生き活きと学んでいく授業と、生徒たちに暗記をさせてテストする授業と、どちらが楽しいかは明らかです。

編集部：外国語を楽しく学ぶというのが、グノーブルの英語教育に対する独自性ということでしょうか。

関田：その通りです。そして、英語教育の行い方や教材だけでなく、先生方が生徒と向き合う情熱といった点にも“グノーブルらしさ”は現れていると確信しています。保護者の方からの質問で、「先生によって差はありますか」というものがありますが、「それは万事においてありません」とお答えしています。

もちろん先生によって、個々のキャラクターは異なるかもしれませんが、生徒には全力をもって向き合いますし、そのために必要な準備を徹底して行うのは共通しています。そうした、情熱を持った先生がいて、優しく誠実な受付や事務の方々がいて、良きライバルがいるのがグノーブルです。グノーブルに通うことで真の実力がつき、その結果、大学受験での得点力も上がります。勉強のやり方と楽しさがわかっているならば、大学進学後も興味の赴くままに勉強を続けていくことができます。さらには、勉強を楽しく続けられる人は大きな力を持てますから、それを世の中に還元することができます。そのような良い循環をつくっていくことに、私たちは貢献したいと思っています。

* GSL (Gnoble Sound Laboratory) : 中1から高3までの6学年すべてに毎週用意されているオリジナルの英語音声教材。合理的練習法(ワークアウト)も確立されており、英語が得意なグノーブル生の土台を築いている。

英会話
グノキッズ英会話グノキッズを
徹底解剖！

英会話グノキッズが5周年を迎え、9月には新しく6校目となるたまプラーザ校が開校しました。それに伴い、今まであまり知られていなかったグノキッズの先生たちの紹介や、新しくグノキッズに加わった先生たちの魅力を伝えたいと思います！



たまプラーザ校開校

今年の9月25日(火)にグノキッズ6校目の校舎、たまプラーザ校が開校しました。担任講師のセーラ先生はグノキッズ立上げの時からメンバーで、主に赤ちゃんクラスから年長クラスのカリキュラム作成と全クラスの教務に関する責任者をしています。大学院で幼児教育に関する修士号を取得し、保育園での就業経験がある、幼児教育のスペシャリストです。「楽しく遊び、楽しく学ぶ」から「学ぶ楽しさを知る」へ自然と変えていく、先生たちの指導者的立場にもいる先生です！ブランドン先生は9月に入社した新しい先生です。大学で英文学を学び、日本での英会話講師、中国での英会話講師、声優やウェブデザイナーなどのユニークな経歴を持ちながら、直近では、日本の私立小学校でALT*として職に就きました。非常に英語教育に



力をいれている学校で責任者として働いていましたが、昔ながらの英語教育からの脱却や中国の英会話教室でやっていたチームティーチングの利点を活かせる場所を求め、約10年の講師歴を持ち、グノキッズにやってきました。とても楽しい先生で、レッスン初日から子どもたちが集まってくるような魅力ある人柄です！ハロウィンでは、一人ひとりと記念撮影をしました。(写真右)こんな最高の2人の先生が待つたまプラーザ校にぜひお越しください！



セーラ先生 ブランドン先生 高山さん

さて、ここからは、他の5校舎についても紹介します。

白金高輪校

担任講師のソーレン先生は、大学で日本の言語や文化を学び、日本の大学に留学したこともあるため、日本語がとても流暢です。日本では、ALTや学童機能を持つ英会話教室での経歴が長く、グノキッズでは英検®の指導もするなど、教えることに関して多彩な才能を持つ先生です。特にレッスンの雰囲気づくりがはずば抜けています。外見通り紳士的ですが、実はパフォーマーで歌も上手です！YouTubeで、「白金蛸祭り」「グノキッズ」で検索すると、白金高輪で毎年行われる天の川蛸祭り、グノキッズの先生がショーをしている動画が見られます。その中で、歌を歌っている様子が見られるので、ぜひ、ご覧ください！



ソーレン先生 ナオ先生 浅上さん

自由が丘校

自由が丘校はグノキッズ立上げの時からある校舎で、教室は2教室あります。実はグノキッズの宿題オリジナル動画は、こちらの校舎で撮影されることが多いです。担任講師のリアン先生は、大学で英文学、考古学を学び、日本に来てから長く英会話教室で働いていました。子どもから大人まで幅広い層を担当していて、初心者から上級者まで指導経験が豊富です。また、自身もお子さんを持つママ先生です。日本語も上手で、日常会話の中で冗談も言えるぐらいです。担任講師のヨーコ先生は、高校卒業までをアメリカで過ごしていて、大学で社会科学や心理学を学び、日本語こそ大学時代、社会人時代に固めていったという面白い経歴の持ち主です。といっても片言の日本語ではありません！社会人時代は、企画や営業、海外とのやり取り、社内の英語研修など幅広い経験をして、英語脳と日本語脳の両方を持ちグノキッズにやってきました。グノキッズのファルコンズクラス(中級クラス)や英検®講座なども担当しています。



ヨーコ先生 リアン先生 水田さん 勝本さん 平林さん

日本橋校

K-POPとマンガが大好きな担任講師のジェン先生は、大学で言語学を学び、韓国の学校での教育実習、日本での学童機能を持つ英会話教室を経験後、グノキッズにやってきました。ウェブの作成や歌が好きで、とても上手なので、グノキッズの音楽の中にはジェン先生の歌声が入っています。また、日本語も上手で、最近、日本語能力試験(JLPT)を受けて、N2(日常会話+α)に合格しました！多くの外国人にとっては、漢字の読みがとても難しいのですが、独学で合格するくらいの努力家です。英語を学習しているみなさんの気持ちもよくわかります！シェイマス先生は、大学で心理学や人材の管理について学び、オーストラリアの大手銀行の人材育成や情報管理、社内調整を職務としていました。その後日本の英会話講師として経験を積み、グノキッズにやってきました。グノキッズでは、約10年の講師の経験を活かし、人事、採用、宿題動画のプロデューサーとマルチに活躍しています。また、自身もお子さんを持つパパ先生で、子どもを持ったことでより幼児への対応に磨きがかかっています。もちろん、日本語も上手です！



ジェン先生 青木さん シェイマス先生 ポーラ先生

成城学園校

成城学園校は、自由が丘校と同じようにグノキッズ立上げの時からある、グノキッズで一番大きな校舎です。担任講師のサム先生は、大学で映画学と英語学を学び、ゲーム会社のプロジェクトリーダー、日本での英会話講師を経てグノキッズにやってきました。赤ちゃんから小学生、大人まであつという間にその場をアットホームな雰囲気に変えてしまう先生です。イラストがとても上手で、音読ブックを作成しています。また、成城学園校の入口のフランケンシュタインはハロウィン用にサム先生が作った飾りです！(写真下)子どもたちはみんな大喜びでした。その他にも、講師の研修も担当し、全員が高いレベルの教授法を保つ努力をしています。担任講師のリサ先生は、9月に入社した新しい先生です。大学で東アジア言語(日本語)を学び、JETプログラム*1に参加して、「新たな学び教育のモデル校」の中高一貫校のALTとして勤務し、アクティブラーニングやICT*2と現在日本で実践され始めている教育を経験してきました。JETプログラムには任期があるため、新天地を求めたところ、グノキッズのチームティーチング、PBL(課題解決型学習)、PIL(対話型授業)に共感し、入社しました。本当に日本語が流暢で、日本語能力試験N1(幅広い場面での使用が可能・一番上のレベル)を持ち、ビジネスレベルでの日本語使用についても勉強しています。日本語のタイピングもでき、また、日本の有名な水泳選手の通訳をした経験があります。



コージ先生 リサ先生 鈴木さん サム先生

*1 JETプログラム(The Japan Exchange and Teaching Programme): 語学指導などのための外国青年招致事業のことです。
*2 ICT(Information and Communication Technology): 情報通信技術といわれ、ITにコミュニケーションの要素を含めたものです。現在、教育現場では電子黒板やタブレットなどの導入が進められています。

* ALT (Assistant Language Teacher): 日本の小中高等学校において、英語授業の際に日本人教師を補佐する外国人のことで、外国語指導助手といわれます。

経堂校

担任講師の**カール先生**は、大学でコミュニケーションやジャーナリズムについて学び、保険会社に就職後、韓国に渡り、英語講師をしていました。ここでは、アフタースクールでの3時間の英会話レッスンやTOEIC®を教えることもあり、韓国の教育熱が非常に高いなど感じたそうです。その後、日本でALTや英会話講師を経験して、グノキッズにやってきました。親しみやすく、面白い先生で小さな子どもを笑わせるのがとても上手です。普段は人見知りをする小さな子どもが、いつの間にかカール先生と二人で大笑いをしていて、お父さんお母さんがびっくりしてしまったというエピソードもあります！また、サッカーやヒップホップダンスが好きで、日本でも話題になったフラッシュモブをして楽しんだそうです！



カール先生

山本さん

いろいろな校舎

ジェイムズ先生も9月に入社した新しい先生です。大学で東アジアや東南アジア、ジャーナリズムを学び、飲食店でのマネージャーや有名ファッション店でのスーパーバイザー、日本では英会話講師をしていました。英会話講師では、いろいろな幼稚園で短時間のレッスンを提供するような仕事でしたが、**より深く生徒に関わりたい**と思い、グノキッズにやってきました。ヒップホップダンスが大好きで、出勤前にジムに行き、レッスン後にはダンスレッスンをしに行くタフな先生です！宿題動画でダンスを披露する日も近いかもしれません！



ジェイムズ先生

グノキッズキャラクター：アレックスとゾーイ

アレックスは、グノキッズのマスコットキャラクターです。アレックスアドベンチャーという、毎日楽しく英語を学習できるグノキッズのオリジナル宿題動画に出てきます。「何の動物？」と聞かれることがあります。「ゾウ？」「アリクイ？」……その答えは、「ツチブタ」です！そして、アレックスの一番の友達が青虫の**ゾーイ**です。他にも動画の中にはたくさんの友達がいいます。アレックスは自分の飛行機で世界中を飛び回って、探偵としてミステリーの解決に日々忙しくしています。**アレックスに聞きたいことがあれば、それぞれの校舎にあるポストに手紙を入れると動画の中で答えてくれることがあります！** みんなからの質問を待ってるよ！



グノキッズの新しい看板です！

このような講師、受付スタッフが協力しながら、生徒の英語力の向上に真剣に取り組んでいます。**ただ楽しいだけの英会話教室ではなく、しっかり身につく本物の英語教育を提供していけるよう、生徒一人ひとりが英語に本気になれる環境を作っています。**

グノキッズニュース

ニュース① グノーブルグループに通われている方からのご紹介でご入室いただくと、割引や商品券贈呈などの特典がありますので、ぜひご紹介ください！

ニュース② 12/25～12/27、1/4、1/5の期間は、ウィンタースクールと題して、中学生のプライベートレッスンを開講しております。英会話や外国人講師のレッスンを受けてみたいという方はウェブをご確認ください！

グノキッズの英検®

グノキッズでは、2017年から英検®対策講座を開講しています。少しずつ英検®を受験する生徒が増え、それに伴い対策講座の受講者も増えてきています。ただし、グノキッズの英語教育の根本は、「試験に合格するための学習」ではありません。誤った試験の受け方がお子様の「英語」への印象に悪い影響を与えかねません。グノキッズに入った結果、英語が嫌いになってしまったということにだけは絶対にしません。

そのため、グノキッズの生徒には英検®受験に際して下記のように説明をしています。

英検®を受験したい生徒は、英文を読む必要があります。フォニックスのルールをもとに英文を読み、訳せなくてもなんとなく意味がわかることが最低限必要な力です。基本的には英検® Jr. ゴールドまでを受験し、その後5級に向けてのリーディング力をつけていきます。グノキッズでは確認テストを行い、まず生徒自身に「自分の力」を知ってもらいます。

グノキッズの方針が「試験に合格するためではない」と前述しましたが、それは決して、英検®が語学学習の過程にまったく役に立たないツールだと言っているわけではありません。「楽しい英会話」の学習から、「本物の英語」を身につけることができる、そのためのツールに英検®がなり得るということです。

英検®をツールとしておすすめしている理由に

①試験慣れと級取得がベネフィットになる

現行の教育システムでは英語の試験は、ほぼ誰もが受けます。英検®新方式が2020年度からはじまる「大学入学共通テスト」に採択され、小学生のうちから慣れておくことは優位になると考えます。また、3級以上の資格取得を中学受験で優遇する学校が今後も増加していくと考えられます。

②目標がさらなるモチベーションアップにつながる

試験を受ける準備が整うと、生徒は自信を見せ始め、特に受験をして合格をした生徒はクラスでの発言が増え、アウトプットの量が大きく変化します。

③自己評価のツールの一つになる

どの分野が優れていて、どの分野を強化したらよいかを客観的に判断できます。講師にとっても有益な情報になります。

もちろん、グノキッズでは、英検®を受験したい生徒をできるだけサポートします。それぞれの級のための文法に特化した英検®対策講座や、実際の英検®に似せた模試を準備しています。模試では、模試当日に、添削と解説を実施するため、受けたら終わりの、ただの実力試しの試験にならないよう、その日に解決し無駄にならない「英検®模試」としてしています。右記は10月に行われた英検®の結果です。みなさん本当にがんばっていて、講師、スタッフみんながとてもうれしく思っています！



自由が丘校 自由が丘駅南口から徒歩約2分 03-6715-6684 東京都世田谷区奥沢 5-29-7 自由が丘 CR ビル 2F	成城学園校 成城学園前駅南口から徒歩約2分 03-6805-8842 東京都世田谷区成城 2-26-15 成城 CR11 ビル 1F	白金高輪校 白金高輪駅2番出口から徒歩約5分 03-6435-0662 東京都港区三田 4-8-36 三田MTビル 4F	日本橋校 馬喰横山駅A3出口・東日本橋駅B1出口から徒歩約4分 03-6661-1917 東京都中央区日本橋久松町 6-9 AS ONE 日本橋 East 1F	経堂校 経堂駅北口から徒歩約3分 03-6413-0411 東京都世田谷区経堂 2-5-15 プリンスガーデンズ 1F	たまプラーザ校 たまプラーザ駅南口から徒歩約3分 045-530-9863 神奈川県横浜市青葉区新石川3-4-1 たまプラーザ CRビル 1F
---	---	---	---	--	--

グノーブルの先生は「近い」

私たちはすぐに皆さん全員の名前を覚えます。

授業中には、黒板や教材ではなく、皆さんと向き合っています。

教材の用意も、授業の準備も、皆さんの顔を念頭に置きながら。

個別添削も毎回行い、一人ひとりの成長を応援していきます。

皆さんと互いに敬意を持てる関係、明るく活気ある環境を堅持します。

グノーブルで、頭をフルに使う楽しさを実感してください！

大学受験



Gnoble

大学受験 グノーブル

難関大学・医学部を目指す中1生～大学受験生

本物の知的体力がますます求められています。その知の力を伸ばすのに最も大切な要件は、前向きになれる、知的刺激にあふれた環境で学ぶことです。授業形式、教材、そして、教職員の接し方に至るまで、皆さんが意欲的になれる環境を整備し、難関大学・学部を目指す皆さんをしっかりサポートしていきます。

中学受験



Gnoble

中学受験 グノーブル

難関中学を目指す小学生

最新の入学傾向に対応したカリキュラム、精選されたオリジナルテキストを基に、経験豊かな講師陣が一人ひとりに向き合った双方向の授業を展開し、難関中を目指す子どもたちを導いていきます。学習したい教科や志望校別のクラスが選択できるなど、中学受験に関するさまざまなご要望にお応えしていきます。

個別指導



GnoLink

個別指導 グノリンク

難関校を目指す小学生～大学受験生

生徒一人ひとりに心を配り、その子の持つ可能性を追求します。学習状況に合わせて、講師1名に生徒2名、あるいは生徒1名の完全個人指導体制を提供します。中学受験・大学受験グノーブルと並行して通うことも可能です。グノーブルオリジナルテキスト等も併用しながら、個別に対応します。

英会話



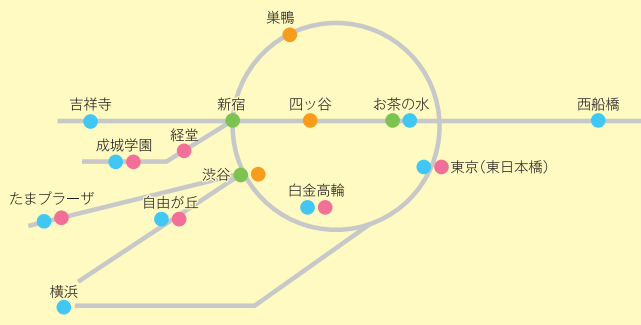
GnoKids

英会話 グノキッズ

0歳児～小学生

さまざまな楽しい英語体験を通して、聞く、話す、読む、書くの4つの力を伸ばします。先生2名に生徒は8名程のクラスで、ネイティブの英語に触れ、親むことができます。ご家庭での学習も配慮した教材で、継続的な学習を無理なく行うことができます。

Gnoble グループ 各校舎所在地



Gnoble

GROUP

大学受験 グノーブル
個別指導 グノリンク

中学受験 グノーブル
英会話 グノキッズ

グノーブル総合案内

www.gnoble.com